慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山家集伝本考
Sub Title	
Author	寺澤, 行忠(Terasawa, Yukitada)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1981
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.18 (1981.) ,p.373- 441
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	麻生太賀吉大人追悼記念論集 挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000018-0373

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山家集伝本考

寺澤行忠

はじめに

『新古今和歌集』において、最多の歌を撰入された歌人、西行の歌集として、『山家集』、『聞書集』、『残集』、『山家心中集』、『西行上人集』（『異本山家集』『西行法師家集』などとも）、『別本山家集』などがある。また現在、西行の歌として、二千九十首余りが知られているが、その約四分の三の分量を収載して、最多の歌数を有する歌集が『山家集』である。

『山家集』の本文に関する研究成果には、戦前既に『西行全集』（佐々木信綱氏・川田順氏・伊藤嘉夫氏・久曾神昇氏編、昭和十六年二月、文明社刊）があって、それまでの文献学的成果を集大成したものであるが、この中で、伊藤嘉夫氏が、陽明文庫蔵本を底本に、平井卓郎氏蔵版本書入れ本など数本を校本に用いて「纂校山家集」を編纂され、解題を付されたのであった。その成果は、「日本古典全書」（朝日新聞社刊）中の『山家集』（昭和二十二年十二月刊）に受け継がれ、さらに完備されたものとなっている。『山家集』のみならず『聞書集』その他によって歌が増補され、西行詠歌を総覧できるものとして、現在でも広く用いられている。右の、底本及び校本として用いられた本を中心とするさらに詳しい解題が、『纂訂西行法師全歌集』（昭和十年二月、大岡山書店刊）、「西行歌集の展望」（『歌人西行』所収、昭和三十一年七月、鷺の宮書房刊）などによって発表されている。

さらにその後公刊された「日本古典文学大系」（岩波書店刊）中の『山家集　金槐和歌集』（風巻景次郎氏校注、昭和三十六年四月刊）、「私家集大成」（和歌史研究会編、明治書院刊）中の『山家集』（「中世Ⅰ」所収、後藤重郎氏・山木幸一氏、昭和四十九年七月）に於ても、陽明本が底本として用いられている。前者は、陽明文庫蔵六家集本を底本とし、底本の明らかな誤りを流布版本によって正したものであり、後者は、陽明文庫

蔵本の本文を、「可能な限り底本に忠実な形において翻刻」したものであって、解題が付されている。

又、近時桑原博史氏によって編纂された『西行全歌集上　山家集』（昭和五十六年四月、新典社刊）では、陽明本をよりよく理解する上に役立つものとして、筑波大学蔵本がとりあげられ、同本が翻刻されている。さらに松屋本、別本などにより歌を補ったうえで、同本の詳細な解題を付されている。

『山家集』諸本に関する研究に、「山家集諸本の研究（一）」（高城功夫氏『東洋大学大学院紀要』昭和四十六年三月）がある。諸本を博捜され、丹念に調査されたものであった。

個々の伝本については、まず松平文庫蔵本に関しては、

「松平文庫蔵本『山家集』について――西行関係典籍略解題㈢」（糸賀きみ江氏、『和歌史研究会報』四十二号、昭和四十六年六月）

日本女子大学蔵本に関しては、

「日本女子大蔵本『山家集』―西行関係典籍略解題㈣」（糸賀きみ江氏『和歌史研究会報』四十八号、昭和四十七年十二月）

市岡氏蔵本に関しては、

「訪書雑記」所収市岡勝太郎氏蔵山家集解題（『和歌史研究会報』五十七号、昭和五十年十月、橋本不美男氏・久保木哲夫氏・杉谷寿郎氏）

「山家集―市岡勝太郎氏蔵本紹介―」（糸賀きみ江氏『和歌史研究会報』五十七号、昭和五十五年十一月）

書陵部蔵丙本（桂宮本）については、

『図書寮典籍解題　文学篇』（宮内府図書寮編、昭和二十三年十月）

又松屋本に関するものに、

「古鈔本山家集残闕本について」（伊藤嘉夫氏、『文学』岩波書店、昭和九年六月号）

「新たに発見された西行の和歌」（平井卓郎氏『文学』岩波書店、昭和十年二月号）

「松屋本『山家集』について」（高城功夫氏、『和歌文学研究』第四十三号、昭和五十五年十一月）

などがそれぞれある。

以上の如き、多くの先学の優れた研究の積み重ねによって、『山家集』の伝本に関する研究は、大いに進展をみたのであるが、なお今後に俟つ問題も少なくないように思われる。

さて、『山家集』の伝本については、今日までにその殆んどを調査することを得たと信ずる。本文全体を精査するには到っていないが、これは他日を期することとし、今、主として歌の排列及び異同の面から、又本文については、問題を含むと思われる箇所を抽出調査することにより、『山家集』諸本に検討を加え、それらの諸本の性格の概要を明らかにしたいと思う。

今日までに管見に入った諸本は、次のとおりである。（括弧内は略称）

一、版本系諸本

1版本

2長崎県立長崎図書館蔵〔江戸後期〕写　（長）

3 国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写　（国）
4 久曾神昇氏志香須賀文庫蔵〔江戸末期〕写　甲本（志甲）
5 志香須賀文庫蔵〔江戸後期〕写　乙本（志乙）
6 志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕写　丙本（志丙）
7 志香須賀文庫蔵明暦三年写　丁本（志丁）
8 東京都立中央図書館蔵〔江戸中期〕写（都）
9 書陵部蔵〔江戸中期〕写　甲本（書甲）
10 静嘉堂文庫蔵〔江戸後期〕写（静）
11 神作光一氏蔵嘉永七年蒼翠館主人写（神）
12 市立米沢図書館興譲館文庫蔵文化七年写（米）
13 穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写　甲本（穂甲）
14 穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写　乙本（穂乙）
15 大倉精神文化研究所蔵〔江戸後期〕写（大）
16 東北大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写　甲本（東甲）
17 東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸後期〕写乙本（東乙）
18 三手文庫蔵〔江戸中期〕写（三）

二、陽明文庫本系諸本

第一類本

A 陽明文庫蔵〔江戸初期〕写（陽）
学習院大学国文学研究室蔵〔江戸中期〕写（学）
B 書陵部蔵〔江戸中期〕写　乙本（書乙）
C 島原公民館松平文庫蔵〔江戸前期〕写（松）
京都大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写（京研）

第二類本

A 関西大学図書館蔵〔江戸前期〕写　甲本（関甲）
B 関西大学図書館蔵〔江戸中期〕写　乙本（関乙）
東洋大学図書館蔵〔江戸中期〕写（東洋）
C 日本女子大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写（日）
市岡勝太郎氏蔵〔江戸前期〕写（市）
天理図書館蔵〔江戸前期〕写　甲本（天甲）
お茶の水図書館蔵〔江戸中期〕写　甲本（茶甲）
京都大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写（京）
筑波大学図書館蔵〔江戸前期〕写（筑）

第三類本

A 天理図書館蔵〔江戸前期〕写　乙本（天乙）
神宮文庫蔵〔江戸前期〕写（神宮）
B 書陵部蔵〔江戸前期〕写　丙本（書丙）
お茶の水図書館蔵〔江戸後期〕写　乙本（茶乙）

第四類本

多和文庫蔵〔江戸後期〕写（多）

三、松屋本系諸本

平井卓郎氏蔵版本書入れ本
天理図書館蔵竹柏園旧蔵〔江戸初期〕写残闕本

凡　例

一、本稿に於て、基準として用いたのは版本である。後述する如く、版本は現行西行諸歌集の中で最多の歌数を有し、近世

広く流布して、多数の読者を獲得したものであるからである。

一、歌の冒頭には、私に付した版本の通し番号を冠し、括弧内に陽明文庫本の番号（私家集大成本番号）を付して対照した。歌を引用しない場合もこれに準じた。

一、歌の詞書に付した〔　〕は、前歌に付されているものであることを示す。

一、版本では620（605）歌は、491（481の次）にも重出するが、他の版本系諸本で、重出歌を算出する際には、このケースは除外した。

一、装訂の袋綴、料紙の楮紙は省略した。函架番号も、原則として省略した。

一、書誌の記述には、先学の御論考の中で、既に著録されているものとの間に、しばしば重複を生ずることともなった。殊に高城功夫氏の御論考（「山家集諸本の研究」（一）、前掲）では、本稿で採り上げた志香須賀文庫蔵甲本、東北大学附属図書館蔵甲本、三手文庫蔵本、日本女子大学国文学研究室蔵本、市岡勝太郎氏蔵本、お茶の水図書館蔵甲本、同乙本以外の各本について、広く扱っておられる。

が、先学と必ずしも見解を同じくしない点もあり、又『山家集』全体を通観する必要から、これを省略せず、できるだけ簡潔に記述することにした。

諸本の調査に際しては、上記御論考をはじめ、多くの先学の御業績の学恩に浴した。深く感謝申し上げる次第である。

一、版本系諸本

1版　本

〔慶安〕刊本

近世初期、いわゆる六家集の一として刊行され、流布したものである。六家集は、恐らく室町時代後期に纏められたものと思われ、細川幽斎の編にかかるかともいわれるが、はっきりしたことは分っていない。（松野陽一氏『藤原俊成の研究』五九頁参照、昭和四十八年三月、笠間書院刊）

六家集版本は、書林書目の中でも初出と思われる『和漢書籍目録』（〔寛文六年頃〕刊）に、「六家集、三十一冊」とある如く、早印の時代には、三十冊本として刊行されたものである。管見に入った三十冊本には、神宮文庫蔵本、龍谷大学図書館蔵本、大阪府立中之島図書館蔵本、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵本、佐賀大学附属図書館蔵本、架蔵本等がある。

歌集の排列に関しては、版本自体には、排列を示すような記載は、全くみられない。『増補書籍目録』（寛文十年刊）には、「六家集」の項に「俊成卿、後京極、慈円僧正、定家卿、家隆卿、西行法師右六人の家集」と記されている。以後の目録類を見るに、『広益書籍目録』（元禄五年刊）が、慈円僧正と定家卿を逆に記載し、『新版増補書籍目録』（元禄十二年、京都永田調兵衛等三名刊）が「後京極、慈鎮、西行、俊成、定家、家隆」として

いるほかは、『増補書籍目録』（寛文十一年、京都山田市郎兵衛刊）、『古今書籍題林』（延宝三年毛利文八刊）、『貞保二年板広益書籍目録』、『延宝三年刊新増書籍目録』、『天和元年刊書籍目録大全』（山田喜兵衛刊）、『増益書籍目録大全』（元禄九年河内屋喜兵衛刊、同宝永六年増修丸屋源兵衛刊）、『増益書籍目録大全』（元禄九年刊正徳五年修、丸屋源兵衛刊）など、多くが『増補書籍目録』（寛文十年刊）と同じ排列で掲出している。よって、以下の記述では、この排列に従って掲出することにする。

まず、『山家集』を含めた六家集版本の書誌を記すと、次のとおりである。

三十冊。無辺無界。印面高さ約二十一糎。毎半葉十二行。毎行二十七字内外。版心は印刷されておらず、綴じ代の部分に、版木の順序を示す附号が印されている。

印刷題簽「長秋幾／俊成卿」・「月清幾／後京極殿」・「拾玉幾／慈鎮和尚」・「拾遺幾／定家卿」・「拾遺員外幾」・「壬二幾／家隆卿」・「山家幾／西行上人」の如く印す。但し、作者名は、各家集第一冊にのみ付されている。

内題「長秋詠藻上（中、下）」（三冊）・「式部史生秋篠月清集一（～四）」（四冊）・「拾玉集巻第一（～七）」（七冊）・「拾遺愚草上（拾上ノ下、中、中ノ下、下、下ノ下）」（六冊）・「拾遺愚草員外雑哥上（下）」（二冊）・「壬二集上（上ノ下、中、中ノ下、下）」（五冊）・「山家和歌集上（下、下ノ下）」（三冊）。右のうち、「上ノ下」・「中ノ下」・「下ノ下」の場合は、書名を含め小字に作っている。

この三十冊本は、版心が印刷されていないことが特徴で、早印と思われる、印面の鮮明なものである。

佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵本は、三十一冊本であるが、うち一冊は『順徳院御集』の中冊が、誤って混入したものである。従って実数はやはり三十冊であり、すると、『和漢書籍目録』に記載されている三十一冊というのは、如何なるものを指すのか、不審に思われるのである。恐らく、同本の記載に誤りがあるのではなかろうか。

ところで、従来六家集版本の刊年に関しては、『拾玉集』巻末に、「此拾玉集者申請竹内門跡御本七冊書写之処不審繁多／也仮申出青門御本五冊再三／比校而正烏焉之差誤尤可／為證本者也／文禄第三暦林鐘初二／丹山隠士玄旨在判」とある本奥書の年紀の「文禄第三云々」を刊記と誤ったためであろう、長く元禄三年開板といわれてきたが、前掲佐賀大学附属図書館蔵六家集『拾玉集』巻末には、右の跋文を記した次葉に、さらに次の如き跋文が刻されている。

一氏者四道家流共居其一勉哉／復古之業有待焉遂書／慶安元年戊子／戸部法印道春（印）

これは、慶安元年版『延喜式』に付された道春（林羅山）の跋文の末尾部分が誤綴されたものである。この混入は、管見に入った数本の三十冊本六家集の中でも、佐賀大学蔵本のみにみられる。が、ともあれこれによって、六家集版本の成立が、慶安元年を遡らぬものであろうことが推定されるのである。

因みに、国立国会図書館蔵六家集十八冊本版本〔一九九・一

一・二〕の『壬二集』下巻巻末には、墨筆にて、六家集の書名とそれぞれの冊数を記し、さらにその後に、「私云拾玉集末に／一氏四家……／……／慶安元……／戸部法印道春（印）」と記している。すなわち、佐賀大学附属図書館本にみられる慶安元年版『延喜式』跋文と同一のものを略記しているのである。道春の跋文の混入した六家集もある程度行われたのであろうか。

しかし、これよりもさらに信ずべき資料がある。神宮文庫蔵六家集三十冊本中の『山家集下ノ下』巻末に、次の如き注目すべき奉納識語が存することを、昭和五十三年十月の同文庫に於て調査させていただいた折、見出した。

六家集全三十冊奉納于／豊宮崎文庫／慶安三庚寅夏五月吉旦／洛下書堂風月宗左衛門昌重

首葉に「宮崎文庫」の朱印を有することにより、宮崎文庫旧蔵本であることは明らかである。すなわち、慶安三年五月に、書肆より豊宮崎文庫に奉納されたものである。当時の習慣として、書肆が伊勢神宮に奉納するということがあり、刊行後、程経ぬ時点で奉納されたものと思われるが、そうすると、六家集版本の刊行が慶安三年頃であり、発行元が風月宗左衛門であることを知るのである。

右の三十冊本を、二十冊に合冊したものに、三手文庫蔵版本〔哥・二〇・伍・二九三〕がある。

〔慶安〕刊後修本

三十冊本六家集版本は、広く流布をみないまま、時を隔てず十八冊に合冊されることになる。先に引用した、『増補書籍目録』（寛文十年刊）には、「六家集　十八冊」とあり、遅くも寛文十年には十八冊に合冊されていたのである。現在属目する六家集版本の殆んど—『山家集』について言えば、単独で蔵されるものも含めると、全国で百本以上にも上るかと思われるが—は、十八冊本である。その分巻の次第は、次の如くである。

長秋詠草三巻二冊、式部史生秋篠月清集四巻二冊、拾玉集七巻五冊、拾遺愚草三巻三冊、拾遺愚草員外二巻一冊、壬二集三巻三冊、山家和歌集二巻二冊。

合冊に際しては、版心に略書名、巻次数、下方に丁附を印している。

次に、合冊された外題によって、各冊の丁附を掲出する。

長秋上中、「長上　初（〜十六）」「長中　初（〜十八）」、長秋下、「長下　初（〜三九終）」—五、又五と重出—、月清一二、「月一　初（〜二十九）」「月二　初（〜廿五）」、月清三四、「月三　初（〜廿六）」「月四　初（〜廿三終）」、拾玉一二、「玉一　初（〜卅七）」「玉二　初（〜卅九）」、拾玉三、「玉三　初（〜卅六）」、拾玉四、「玉四　初（〜五十八）」、拾玉五、「玉五　初（〜六十二）」、拾玉六七終、「玉六　初（〜四十四）」、「玉七　初（〜四十三）」、拾遺上、「拾上　初（〜九十三）」、拾遺中、「拾中　初（〜四十）」、拾遺下、「拾下　初（〜六十八）」、拾遺員外上下、「員上　初（〜卅五）」「員下　初（〜卅二終）」、壬二上、「壬上　初（〜七十七）」、壬二中、「壬中　初（〜七十七）」、壬二下、「壬下　初（〜卅二終）」、山家上、「山上　初（〜四十八）」、山家下、「山下　初

（〜七十一）」

〔慶安〕刊後修、京・風月荘左衛門印

この六家集は、需要が多かったのであろう、版を重ねて、次第に印面の磨滅した、不鮮明なものが出回るようになった。『増益書籍目録大全』（元禄九年河内屋喜兵衛刊、同宝永六年増修丸屋源兵衛刊）、『増益書籍目録大全』（元禄九年刊正徳五年修、丸屋源兵衛刊）などには、「六家集（ろくかしゅう）」の項に、十八という冊数を示した後、上村・吉田・風月の出版元名を印している。

十八冊本六家集の中には、次の如き奥付を有するものがある。

二条通衣棚／京都書肆／風月荘左衛門

上述の三書肆のうち、風月を代表としたものであろう。この奥付は、内閣文庫蔵六家集版本〔201・528〕や、神宮文庫蔵六家集版本〔三・1456・18〕などでは、『拾玉集』の巻末に、長崎県立長崎図書館蔵六家集版本〔諏訪文庫11及び12〕では、『山家集』の巻末にみられる。『拾玉集』巻末に付せられているのは、同書にのみ、玄旨の奥書が印されていることと、関係があるのであろうし、『山家集』巻末に付せられているのは、多くの目録類で同書が最後に排列されていることによるものであろう。

一方、神宮文庫蔵山家集〔三・1199・1〕、京都大学附属図書館蔵山家集〔23・サ・4〕など、単独で蔵される『山家集』にも、同一の奥付を有するものがある例をみると、あるいは「山家集」単行の後刷本が印行されたか、とも思われる。

さて、次に六家集中の『山家集』のみについてとりあげることにする。まず『山家集』各巻の内容をみると、上巻が四季及び恋、下巻が雑となっている。727（712）歌以下が下巻である。歌数一五六九首、うち、

寄紅葉恋

620わか涙時雨の雨にたくへはや
紅葉の色の袖にまかへる（605）

の歌は、491（481の次）に重出する。陽明文庫本では、491の方がなく、重出しない。贈答歌における他人の詠七十七首。但し、208（203）歌は、版本では詞書を欠き、他人の歌であるにもかかわらず、西行の歌の如くになってしまっている。以上によって、西行の歌の実数は、版本で一四九一首である。

版本所載歌と、陽明文庫本のそれを比較してみると、版本にあって陽明文庫本に欠く歌は二十三首—但し、この中には前掲版本重出歌を含むから、実数は二十二首であるが—、逆に陽明文庫本にあって版本に欠く歌は六首である。それぞれを以下、版本独自歌、陽明本独自歌と呼ぶことにする。次にその版本独自歌を掲出する。

〔立春の朝よみける〕

5とけ初るはつ若水の気色にて
春立ことのくまれぬるかな（4の次）

はるきて猶雪

11かすめとも春をはよその空にみて
とけんともなき雪の下水（9の次）

梅を
37香にそまつ心しめをく梅のはな
色はあたにも散ぬへけれは（34の次）
〔水邊卯花〕
179山川のなみにまかへる卯花を
立かへりてや人はおるらん（176の次）
時鳥を
196ほとゝきすきく折にこそ夏山の
青はゝ花におとらさりけれ（192の次）
〔五月五日山寺へ人のけふいる物なれはとてさうふをつか
はしたりける返ことに〕
211五月雨の軒の雫に玉かけて
やとをかされるあやめ草かな（206の次）
〔ある所にて五月雨の哥十五首よみ侍し人にかはりて〕
220五月雨はいさら小川の橋もなし
いつくともなくみほになかれて（215の次）
〔月〕
317月すみてなきたる海の面かな
空の波さへ立もかゝらて（311の次）
月前に友にあふといふことを
420うれしきは君にあふへきちきりありて
月に心のさそはれにけり
〔虫のうたよみ侍けるに〕
462ひとりねのねさめのとこのさむしろに
涙もよほすきりくす哉（454の次）
〔虫のうたよみ侍けるに〕
467物おもふねさめとふらふきりくす
人よりもけに露けかるらん（458の次）
〔寄紅葉恋〕
491我なみた時雨の雨にたくへはや
紅葉の色の袖にまかへる（481の次）
〔長楽寺にて夜紅葉を思ふと云事を人々よみけるに〕
502神無月木葉の落るたひことに
心うかるゝみ山へのさと（491の次）
夜初雪
537月出る軒にもあらぬ山のはの
しらむもしるしよはの白雪（525の次）
雪のうたよみけるに
541あらち山さかしくくたるたにもなく
かしきの道をつくるしら雪（528の次）
〔としのくれにあかたより都なる人のもとへ申つかはしけ
る〕
589山さとに家ゐをせすはみましやは
紅ふかき秋のこすゑを（575の次）
〔夢会恋〕
596あふことを夢也けりと思わく
心の今朝はうらめしきかな（581の次）
父のはかなくなりにけるそとはをみて帰りける人に

805 なきあとをそとはかりみて帰るらん
　人の心を思ひこそやれ（790の次）
〔題しらす〕
989 杣くたすまくにかおくの河上に
　たつきうつへしこけさ浪よる（974の次）
〔題しらす〕
1023 錦をはいくのへこゆるからひつに
　おさめて秋は行にか有らん（1007の次）
　天王寺へまいりけるにかた野なと申渡り過てみはるかされたる所の侍けるを問けれはあまの川と申をきゝて宿からんといひけんこと思ひ出されてよみける
1113 あくかれしあまのかはらと聞からに
　昔の波の袖にかゝれる（1096の次）
　松の木のまよりわつかに月のかけろひけるをみて月をいたゝきて道を行といふことを
1168 くみてこそ心すむらめしつのめか
　いたゝく水にやとる月影（1151の次）
　神楽に星を
1235 ふけて出るみ山もみねのあか星は
　月待えたる心ちこそすれ（1217の次）

右のうち、1113（1096の次）歌は、西行が『御裳濯河歌合』二十九番左に自撰している歌であることが注意される。

なお、下巻の十二カ所にイ本校合がなされている。それらは、982（968）、988（974）、991（976）、992（977）、996（981）、1011（996）、1064（1048）、1203（1186）、1239（1221）、1338（1320）〔二カ所〕、1359（1341）の各歌あるいは詞書である。又1026（1010）には、イの記号の付されていない校合注がある。校合注の施されている箇所が、やや集中的にあらわれている点が注意される。右のイ本は、すべて陽明文庫本に一致する。版本成立の時点で、すでに陽明本系本文と接触している事実を知ることができる。

次に本文を見ると、版本には誤りが多い。次に顕著な例を掲出する。（　）内に誤りを正した本文を、〔　〕内に、版本と同じ誤りを犯している伝本を、略称をもって掲げる。

73（71）第五句　なからなん（ひるなからなん）〔長・国・志甲・志乙・志丙・書甲・静・穂乙・大・東甲〕、223（218）第五句　五月の比（五月雨の比）〔長〕、225（220）第五句　五月の比（五月雨の比）〔長・志甲・志乙・書甲〕、429（422）詞書　鴈聲遠を（鴈聲遠近）〔長・国・志甲・志乙・志丙・志丁・書甲・静・神・米・穂甲・穂乙・大・東甲・東乙〕、433（426）第二句　むつことつわて（むつことつきて）〔長・国・志乙・志丙・志丁・静・穂乙・大〕、482（473）初句　いとゝ山（いとか山）〔長・国・志甲・志乙・志丙・志丁・都・書甲・静・神・米・穂乙・大〕、733（718）第四句　いとふにたにみも（いとふにたにも）〔長・志丙・書甲〕、793（779）詞書　堀川の房（堀川の局）〔長・国・志丙・志丁・書甲・静・神〕、960（945）初句　うらつふす（うつらふす）〔長・国・志丙・志丁・都・書甲・静・神・米・東甲〕、1012（997）第二句　そはたつ木にを（そはのたつ木に）〔長・国・志丙・志丁・書甲・静・神・

米・穂乙・大・東甲〕、1058（1042）詞書　秋風楽としかく也けり（秋風楽と申かく也けり）〔長・国・志丙・書甲・神・米・穂甲〕、1290（1272）第四句　みさほをける（みさほ成ける）〔長・国・書甲・静・神・穂甲、志丙は「みさほ」をの次一、二字分空白〕、1291（1273）第四句　人めも也しらぬ（人めもしらぬ）〔長・書甲〕、1382（1364）第四句　きこもりなんと（かきこもりなんと）〔長・国・志丙・都・書甲・静・神・米・穂甲・穏乙・大・東甲・東乙〕、1477（1459）第五句　いひちらせて（いひちらさせて）〔長・志丙・志丁・書甲・静・神・東甲・国は「ひちらせて」、米は「いひ」と「せて」の間を空白、穂甲は「いひ」以下を空白とす〕

右のうち、433（426）では、「支」の草仮名「き」が、「王」の草仮名「わ」に見え、1058（1642）では、「申」の一部が欠けて、「し」になっている。多くの伝本が「わ」「し」に作っているが、それらが版本の誤刻に基づくものであろうことは、容易に推察できる。掲出しなかったが、7（6）第三句「うへそへむ」を、長・志甲・志乙・志丙・志丁・書甲・神・米・穂乙・大・東甲・東乙が「うへそへは」に作り、9（8）詞書「年越に侍けるに……」を、三・志丁を除く諸本「年超に侍けるに……」と作っているのも、同様の理由に基づくものであろう。

また、版本が三分冊された際に、1111（1095）歌以下が「山家和歌集下ノ下」とされたが、合冊された二冊本にも、この内題は残されている。そして、版本系諸本のうち、穂乙・大・東甲・東乙・三を除く諸本には、この内題が記されている。東乙には、この内題はないが、前歌との間に、一丁分に近い余白を設け、改丁して1111（1095）以下を記している。

書写形態をみると、行格を版本と全く、あるいは殆んど等しくするものに、長・国・志甲・志丁・都・神の各本があり、用字を版本と全く、あるいは概ね等しくするものに、長・国・志甲・志丙・志丁・都・書甲・静・神の各本がある。

以上のような点からみて、本系類に属する伝本の殆んどは、版本による写本であろうと思われる。東北大学附属図書館蔵乙本は、版本に特徴的にみられる誤りと同じ誤りも犯しているが、その数は他の諸本に比べて、かなり少ない。中には、1111（1095）詞書にみられるように「仁和二年」と版本系諸本すべて誤っている年号を、本書のみ「仁安二年」と正しく記述しているような例もある。おそらく他本によって、誤りを正しているのであろう。

そうした中で、三手文庫蔵本は、版本に特徴的にみられる誤りを犯すこと少なく、版本系諸本の中では、版本を遡り得る、注目すべき本文を有している。

版本は、慶安頃に六家集として刊行されて大いに流布し、明治以後も、『山家集』の活版本は、殆んど版本に拠るところのものであった。しかるに、伊藤嘉夫氏により、陽明文庫蔵本が、版本の不備を補うところ少なくない善写本として、『西行全集』の底本とされて以来、陽明文庫本が専ら用いられ、版本は殆んど顧みられないのが現状である。

しかしながら、これを三手文庫蔵本によってみると、版本系

本文の状況はかなり異なる様相を示し、又版本系本文を調査してみると、必ずしも末流の相悪本文とは思われないのである。

『山家集』より抄出された歌集に『山家心中集』がある。なかでも宮本家本『山家心中集』は、西行歌集の中では、最古の所伝を有する一本である。未見であるが全体三筆より成り、そのうちの最初の筆は「西行自筆とも俊成筆とも断定することはできない。しかし、西行とほぼ同時代の人の書写したものであることは疑いない。」（宮本長則氏蔵本『山家心中集』解題、久保田淳氏　日本古典文学会）といわれて、本文の性格を考える場合、最も大きな指標となるものである。いま、版本系と陽明本系で本文が異る場合に、宮本家本の本文がいずれに一致するかを調べてみると、それぞれに一致する詞句は、数十例ずつあり、ほぼ等しい割合を示している。次に、その顕著な例を掲げる。Aは、版本が宮本家本本文に、Bは、陽明本が宮本家本本文にそれぞれ一致する例である。

A	版本	陽明本	宮本家本山家心中集
86(83)第五句	なくやちる	なくやちり	なくやちる
	らん	なん	らん
96(93)初　句	老つとに	おもひいてに	をいつとに
385(379)第二句	所えかほに	心えかほに	ところえかほに
698(683)第五句	我なみた	わかおもひ	わかなみた
	かな	哉	かな
1002(987)初　句	空晴る	空はたゝ	そらはるる

B

12(10)第二句	谷の下水	谷のほそみつ	たにのほそみつ
466(458)第二句	さのみぬる	つゆけかる	つゆけかる
	へき	へき	へき
720(705)第二句	なとゝふ人	とふ人のな	とふ人のな
	の	と	と
1044(1028)第二句	あたになり	あたにやれ	あたにやれ
	行	行	ゆく
1046(1030)第二句	みしよにも	みし世にも	みしよにも
	なく	にす	にす

すなわち、版本系本文も又、西行と同時代まで遡り得る本文を有しているのである。

さて次に、版本系本文で、陽明本系本文の不備を補い得る例を掲げる。

(1)　516（505）詞書に「山家枯草といふことを覚雅僧都の坊にて人々よみけるに」とある。陽明本系諸本「覚範」とあるが、覚雅は顕房の息、神祇伯顕仲の弟で、東大寺の僧、金葉・詞花・千載各集の作者でもある。待賢門院のゆかりによる交友であろうが、覚雅僧都との交友を示す歌は、他にも二首ほどあり、ここは版本によるべきであろう。

(2)　894（879）詞書「方便品深着於五欲の文を」
　　906（892）詞書「神力品於我滅度後の文を」

陽明本系諸本は、894（879）「方便品」、906（892）「於我滅度後の文を」の部分を欠く。（但し、版本系本文に拠るとみられる多

和文庫本で894、906について、又筑波大本で906について版本と同じ本文を有する。）本来存したものが脱落したものであろう。

(3) 1545（1528）「みこしをさのこゑさき立てくたりますをとかしこまる神の宮人」の第五句「神の宮」の部分を筑波大本、天理乙本、多和文庫本を除く陽明本系諸本は脱落している。これら三本は、版本系本文の流入とみられ、おそらく陽明本系の本文には、はじめから脱落があったのであろう。

又、詞書の有無、位置についても、

(1) 版本では63（60）歌の前に「花のうたあまたよみけるに」とある詞書が、陽明本系諸本では65（62）の前に位置している。

(2) 版本では174（172）歌の前にある詞書「三月つ晦日に」を、陽明本系諸本は欠いている。

(3) 版本では243（238）歌の前にある詞書「行路夏といふことを」を陽明本系諸本は欠いている。

(4) 版本では507（496）の前にある詞書「暁落葉」は、陽明本系諸本では506（495）の前に位置している。

右の如き例についても、歌の内容と併せ検討してみると、版本の方がそれぞれ適切である。

以上のような例は、陽明本系諸本にほぼ一致してみられるものであるが、注意しなければならないのは、第一類本C、第二類本C、第三類本などに顕著にみられる如く、転写過程に於ける版本系本文との接触で、陽明本の誤りがしばしば正されていることである。陽明本に限ってみれば、版本によって正される詞句の例は、かなり多数にのぼるのである。

ところで、陽明本系諸本にみられる奥書の中に、次の如き記載がある。

以上哥数千五百五十三首

本云一千五百七十二首云々

右に言う「千五百五十三首」は、陽明本の歌数であり（一首相違するが）、「一千五百七十二首」は、版本のそれに近い。版本の歌数は、一五六九首であるが、祖本に存したと思われる790の次（776）「とりへのや……」や、百首歌に不足する一首などを加えると、この数に近いものとなる。

因みに、日本女子大学蔵本の奥書には、次の如き付箋が施されている。「山家集千五百七十一首斗／上巻七百二十三首、此中二首佗人ノ詠／下巻八百四十八首此中七十三首ハ寂然等ノ哥／一本奥書ニ如斯見ユ」。これは、歌数、分巻の次第から見て、明らかに版本系の写本を指している。現存の版本系諸本には、東京都立中央図書館蔵本に、校本たる書陵部蔵乙本と同一の一本による奥書が転写されている以外、奥書の類はみられないが、当時はかかる奥書を有する版本系の写本が存したのであろう。

また、陽明本系諸本の多くに、727（712）の前に「本是以下為下帖」という注記がみられる。（陽明文庫本のみ「本是次下力下帖」と作る。同本の誤写であろう。）第一類本の学・松・京研の各本と、第四類本の多には、この注記はみられないが、以上四本とも、727（712）より改丁箇所に当っており、殊に松・京研・多の各本は、前歌との間に、余白を設けて、727（712）から改丁している。恐らく、注記のないこれらの諸本も、本来存したも

のが、転写の過程で脱落したものではなかろうか。この727（712）以下を下帖とするのは、版本である。松・京研・多の三本が、727（712）の前にわざわざ余白を設けて改丁していることは、これらの諸本に多量の版本系本文の流入がみられることと併せ、版本系伝本との接触を示すものとして注目されるのである。

ともあれ、陽明文庫本が書写された時点で、すでに版本系伝本と接触していたという事実は、陽明文庫本と版本の成立過程を考える場合、注意しなければならないであろう。

長崎県立長崎図書館蔵〔江戸後期〕写　一冊

縹色無地表紙、二十七・五×一九・二糎。字面高さ約二十一糎。毎半葉十二行。墨付百十九丁。外題、表紙中央に「山家和歌集」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。印記「諫早文庫」。見消ち少々、行格・用字を同じくする版本の忠実なる臨写本。歌数、版本と同じ一五六九首。

国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写　一冊

草色無地裂元表紙。茶色無地改装表紙、十六・六×十一・五糎。料紙、斐紙。字面高さ約十三糎。毎半葉十二行。墨付百十九丁。題簽、元表紙左肩に白地裂短冊を貼付「山家集　全」と墨書。内題「山家和哥集上（下）」印記「醍醐蔵書」「忠順珍賞」等。見消ち（墨）、イ本書入れ（朱）等僅かあり。版本と行格を同じくし、用字もほぼ同じである。歌数一五六八首。1458（1440）歌を書落して、同筆にて書入れている。

排列については、二箇所に異同がみられる。すなわち、989（974の次）は、993（978）の次にあって、988（974）・990（975）・991（976）・992（977）・993（978）・989（974の次）・994（979）の順であり、1379（1361）と1380（1362）は、順序が逆で、1380（1362）・1379（1361）の順になっている。ともに本書のみにみられる排列である。

志香須賀文庫蔵〔江戸末期〕写（存上巻）　一冊　甲本

本文共紙表紙、二十四・五×十七・三糎。仮綴。字面高さ約二十一糎。毎半葉十二行。墨付四十八丁。外題、表紙中央やや左に寄せて「山家集　上」と墨書。内題「山家和歌集上」。歌数は版本上巻と同じ七二六首。版本と行格が同じ。用字をほぼ等しくする。

志香須賀文庫蔵〔江戸後期〕写（存上巻）　一冊　乙本

本文共紙表紙、二十三・五×十七糎。仮綴。字面高さ約二十糎。毎半葉十三行。墨付四十四丁。外題、表紙中央に「山家和歌集　西行」と墨書。内題「山家和歌集上」裏表紙見返しに「藤田与氏蔵」とあり。見消ち、書入れ僅かにあり。403（397）、614（599）の各歌及び下巻を欠く。歌数七二四首。

志香須賀文庫蔵〔江戸中期〕写　二冊　丙本

浅黄色無地表紙、二十六・五×一九・二糎。字面高さ約二十

二・五糎。毎半葉十行。墨付、乾冊五十六丁、坤冊八十二丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼付、「山家和歌集　西行上人　乾（坤）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。表紙見返に「上下二巻之内　土居長沢氏　払物求之尚賢」とあり。版本と同系。

本書は175（173）、1064（1048）、1125（1108）の三首を欠く。又、48（45）、162（160）、473（464）の各歌も脱落しているが、行間に書入れ補入している。しかも473（464）については、470（461）の次と472（463）の次の二カ所に重複して書入れている。又709（693）は726（711）の次に、即ち乾冊巻末に本文と同筆にて本行に書写されているが、さらに707（692）の次にも別筆の書入れがなされており、これも二首重出していることになる。以上によって、歌数は一五六三首、書入れ歌五首である。

排列に関しては、1493（1475）が1500（1482）の次に書写されている。この位置は、巻末百首の「月」題で十首並んでいる最後の位置であり、書落としに気付いて、直ちに書入れたものであろう。

志香須賀文庫蔵明暦三年写　一冊　丁本

栗皮表紙、二十六・八×二十糎。字面高さ約二十一糎。毎半葉十二行。墨付百二十丁。外題、表紙左肩に「山家集」と墨書。内題「山家和歌集上（下、下ノ下）」。上冊には内題下に「有印本　西行法師」（朱）とある。印記「飛騨桐山文庫」「洛西トキハ竜臥山法雲院」。第二丁下方に「飛阜實善」と記す。奥に「明暦第三丁丙沽洗吉旦書功成就早／横夏農夫祖因（花押）」とあって　明暦三年の書写、すなわち、版本成立後程経ぬ時期の書写であることを知る。版本と行格を等しくし、用字もほぼ同じである。歌数、版本と同じ一五六九首。見消ち、書入れ等僅かにあり。

東京都立中央図書館蔵〔江戸中期〕写　二冊

淡黄蘗地草花文様金繡裂表紙、二十七・二×二十糎。字面高さ約二十二糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十八丁、下冊七十二丁。題簽、表紙左肩に短冊を貼付「山家集上（下）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。印記「反町文庫」。

本書は、行格、用字とも版本にほぼ同じくする。ただ不審なのは、版本系諸本にほぼ一致して欠く208（203）詞書「坊なるちここれをきゝて」、又498（488）詞書「暮秋」、901の次（887）歌「いかにして……」などが、本書には本行に存することである。本書は、陽明文庫本系第一類本B、書陵部蔵乙本と同一の一本が校本として用いられ、かなり綿密な校合注が付されているが、右の如き現象を生じた理由は、依拠本における校合注が、転写の際に本行化されたところに求められるのではあるまいか。本書は版本にみられる誤りをそのまま犯しているものが多く、又右の如き詞書を挿入しながら、一面の体裁を無理に十二行として版本に合わせているところなどからみて、版本系の転写本であることは間違いなかろうと思われる。（因みに498（488）詞書については、歌の末尾に「イ」と注記している。）

巻末には「校本云」として書陵部蔵乙本と同一の奥書を記し

ている。又、版本に存し、同本にみられぬ歌を「校本无」と注記しているほか、同本によって集付をしている。

さて、本書は陽明本独自歌六首のうち、113の次（111）、1157の次（1141）、1528の次（1511）の三首を行間に細字で補入している。前述した如く、901の次（887）歌は本行に存する。残る213の次（209）、790の次（776）の二首の書入れはない。おそらく、見落としたものであろう。

又、686（612）を626（611）の次に、1147（1133）を1150（1132）の次に、即ち陽明本系の排列によって書入れ、重出する結果となっている。

以上によって、歌数は一五七〇首、書入れ歌が五首である。

本書には一箇所に、版本と排列の異なるものがみられる。すなわち57（53）・56（54）であるが、この排列は、陽明本系諸本のそれと一致するものであり、前述の、校本の詞句が一部本行化しているのと同様の理由に基づくものであろう。

書陵部蔵〔江戸中期〕写　二冊　甲本
〔函架番号　一五一・四一八〕

薄茶色地横縞文様表紙、二十六・六×十九・四糎。字面高さ約二十・五糎。毎半葉十一行。墨付上冊五十二丁、下冊七十八丁。外題、表紙中央に「山家和歌集　上（下）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。上冊、朱にて「夫木」「続後撰」の集付あり。本文中にもところどころ「抄」と注記して、同じく朱で、夫木抄と校合している。

本書は196（192の次）～200（196）、845（830）、1201（1184）の各歌、計七首を脱落している。又1201（1184）は詞書はあるが、歌及び1202（1185）詞書までを欠く。目移りによる誤写であろう。以上によって、歌数は一五六二首である。版本と行格を異にするが用字を同じくしている。

静嘉堂文庫蔵〔江戸後期〕写　二冊

浅縹色地、下方に金泥にて桐花文様を描ける表紙、二十六・八×十九・三糎。字面高さ約二十一・五糎。毎半葉十二行。墨付乾冊四十六丁、坤冊六十五丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼付「山家和歌集　乾（坤）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。眉上に別筆の書入れがあり、本文中にもそれと同筆の書入れ、見消ちがある。本書も、版本と行格は異なるが用字を殆んど同じくする。歌数は137（135）を欠いて、一五六八首である。

神作光一氏蔵嘉永七年蒼翠館主人筆本　二冊

茶色地鳳凰・唐草等万字つなぎ空押表紙、二十六・九×十八糎。字面高さ約二十一・五糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十七丁、下冊七十一丁。表紙左肩に白紙短冊添付、「山家集　上巻（下巻）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。下巻巻末に「寛政十年戊年季穐九月二日夜写終／銭崖山人／嘉永七年甲寅仲夏八日写終／蒼翠館主人」と記す。版本と行格・用字をほぼ同じくする。

歌数一五六八首。777（762）歌を書落し、朱筆にて書入れてい

る。はじめから一首分の余白を設けているが、後修本でおそらく最初の一字が磨滅して読めぬ為に空白にしておいたところへ、後から補ったものであろう。

排列に関しては、次の箇所が版本と異っている。㈠ 83(80)→90(87) の次、㈡ 126(124)・128(126)・129(127)・131(129)・132(130)・130(128)・133(131)・127(125)・134(132)、㈢ 220(215の次)→226(221) の次、㈣ 357(351)→361(355) の次、㈤ 967(953)→971(957) の次、㈥ 1194(1177)→1199(1182) の次、㈦ 1289(1271)→1292(1274) の次、㈧ 1500(1482)・1499(1481)

市立米沢図書館興譲館文庫蔵文化七年写　二冊

浅縹色無地表紙、二十四・四×十七・二糎。字面高さ約二十・三糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十七丁。下冊六十三丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼付「西行法師山家集　上(下)」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。内題下に「西行法師」と記す。上巻末に「西行山家集上巻終　紙数四拾七枚」下巻末に「西行山家集終　紙数六十枚文化七年二月七日写終」と記す。イ本書入れ僅かにあり。歌数は、724(709)を欠き、一五六八首。贈答歌における他人詠に、しばしば版本にはない作者名を記している。

本書には、二箇所に排列の異同がみられる。すなわち㈠ 1009(993)→1019(1004)の次、㈡ 1194(1177)→1197(1180)の次、であるが、ともに本書に独自にみられる排列である。1009(999) については、改丁第一行目に書写されており、改丁の際に同歌の脱落に気づき、直ちに書入れたものかとも思われる。

穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写（存下巻）　二冊　甲本
〔函架番号　二二248〕

朽葉色無地表紙、二十・二×十四糎。字面高さ約十七・五糎。毎半葉八行。墨付中冊五十一丁、下冊五十五丁。外題、表紙左肩に「山家集中（下）」と墨書。内題「山家和歌集下（下ノ下）」。印記「二条家図書記」。

本書は、分冊の次第からみて、三十冊本六家集版本による転写本であると思われる。見消ちが少々ある。

本書は上巻を欠くほか、下巻の中冊737(722)～742(727)歌までの一丁分六首、及び下冊1555(1538)、1566(1549)、1567(1550)の各歌を欠いている。従って歌数は、中冊三七八首、下冊四五六首、計八三四首である。

穂久邇文庫蔵〔江戸中期〕写　二冊　乙本
〔函架番号　二二・322〕

綴葉装。利休鼠色地に桜花・葉・波形等を白・洗朱・金泥にて描ける表紙、二十四・三×十六・七糎。美麗本。料紙、鳥の子。字面高さ約十九糎。毎半葉十行。墨付全三折五十五丁、下冊全四折八十五丁。題簽、表紙左肩に亀甲文様短冊を貼付「山家和謌集上（下）」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。

歌数は上巻380(374)より404(398)詞書まで二四首を欠いて一五四五首。この欠落箇所は、綴葉装の折の最も内側、ちょうど二丁

分に当っており、脱落によるものであることは明らかである。

本文を版本と比較すると、独自異文がかなりみられるが、それらには誤写に基づくと思われるものが多く、一方、版本特有の誤りを犯している点も多いことから、全体としてみると、版本による写本であると思われる。

本書には数箇所にわたって、版本と異なる排列がみられる。㈠233(228)・234(229)・232(227)、㈡554(541)・555(542)・553(540)、㈢573(560)・572(559)、㈣707(692)→711(696)の次、の各箇所であり、いずれも上巻である。

脱落箇所、排列における異同、異文の状況など、次述する大倉精神文化研究所本に同じくする。

大倉精神文化研究所蔵〔江戸後期〕写　一冊

淡縹色地、白・桃色等彩色牡丹花模様裂表紙、二十六・五×十八・九糎。見返し、山吹色地に金箔を散らす。美麗本。字面高さ約十九・五糎。毎半葉十二行。墨付百八丁。題簽、表紙左肩に銀箔散らし厚手白紙短冊を貼付、「山家和謌集　全」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。イ本書入れ少々。

本書は380(374)より404(398)詞書までの二四首を欠き、歌数一五四五首。又排列の異同は四箇所にみられる。これらの脱落箇所、排列における異同のみならず、異文の状況に至るまで、穂久邇文庫蔵乙本に一致している。

東北大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写　一冊　甲本

打曇表紙、二十三・六×十七糎。字面高さ十九・七糎。毎半葉十二行。墨付百十五丁。外題、表紙左肩に「山家和歌集　全」と墨書。同右下方に「松岡蔵」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。

本書はきわめて特異な形態を有する伝本である。即ち、

難波わたりに年超に侍けるに

9いつしかも春きにけりと津の国の
　なにはの浦をかすみこめけり（8）

を巻頭歌とし、上巻については類纂を試みて再編集しているのである。いま、次に、巻頭部分の歌の排列を、歌番号のみで掲出する。

9(8)、1(1)、2(2)、3(3)、4(4)、5(4の次)、6(5)、8(7)、11(9の次)、16(14)、17(15)、18(16)、7(6)、10(9)、1075(1059)、14(12)、15(13)、26(24)、29(27)、30(28)、31(29)、32(30)、27(25)、19(17)、21(19)

そしてこの上巻部分に下巻より1075(1059)、1086(1070)の二首を、又上巻末に下巻末の百首の中から1511(1493)～1520(1502)の十首を重出せしめているのである。さらに奇異なことには、夏部200(196)の次に、『拾玉集』巻三、賦百字百首、夏十五首の中から、次の五首の歌の混入をみるのである。

ほのかなる忍ひねもかな郭公
また夏あさきうのはなの空
友もなしたゝなれのみそ子規
かたらひ過るみやまへの里

ときしもあれ心をすますたそかれに
名のりてすくる郭公かな
きく人のあかぬ心にほとゝきす
とまりはかりのもろこゑもかな
過きぬるたゝ一こゑのなこりには
あかぬこゝろか山ほとゝきす

いかなる事情によるものか未詳であるが、おそらく別紙に抜書きしながらの編集作業の中で混入したものではなかろうか。

おそらく同様の理由によってであろう、202(198)の詞書も山家集版本で「雨中時鳥」とあるものが、本書では「承久二年閏四月四日和歌所雨中郭公」とする誤謬を犯している。

脱落歌も大量に存する。上巻に12(10)、13(11)、25(23)、28(26)、156(154)、269(264)、271(266)、273(268)、398(392)、441(434)、482(473)、491(481の次)、498(488)、505(494)、506(495)、511(500)、513(502)、568(555)、589(575の次)の十九首、下巻に1510(1492)の一首を欠く。これも再編集作業の途中で欠落したものであろう。以上によって歌数は、上巻七二四首、下巻八四二首、計一五六六首、うち『拾玉集』よりの混入歌五首、重出歌十二首である。

下巻の排列は版本どおりであるが、一カ所、1489(1471)・1488(1470)の歌順が本書独自のものである。

版本と同系であるが、独自の異文を有する。

東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸後期〕写　一冊　乙本

香色無地元表紙、濃褐色無地改装表紙、二十三・八×十六・九糎。字面高さ約十九・七糎。毎半葉十行。墨付百四十丁。外題、元表紙左肩に「山家集」と墨書。改装表紙左肩に子持枠付刷題簽を貼付、「山家集」と墨書。内題「山家和歌集上(下)」。

本書は、92(89)〜100(97)、395(389)、430(423)、588(575)、589(575の次)、1078(1062)、1202(1185)、1379(1361)の各歌を欠く。さらに365(359)歌は、初句のみあって、すぐ366(360)歌の二句目以下に続いてしまっている。すなわち、

あまの原月の比にし成ぬはれ
秋はよるなき心地社すれ

の如くであって、目移りによる誤写であることは明らかである。以上によって、歌数は版本より十七首少ない一五五二首である。

排列は1310(1292)・1308(1290)・1309(1291)となっている箇所が版本と異る。

本書には、第一丁オ右下に「荒井泰淵氏ノ寄附金ヲ以テ購入セル文学博士狩野享吉氏旧蔵書」との朱印がある。又「月詣」「新古今」等の集付が僅かにある。眉上に参考歌、書入れがある。版本には十二カ所にイ本書入れが存するが、本書にはみられない。又、版本に比べ、誤りはかなり少ない。

三手文庫蔵〔江戸中期〕写　一冊

香色無地表紙、二十六・九×十九・五糎。字面高さ約二十三糎。毎半葉十二行。墨付百十一丁。外題、表紙中央に

「山家集西行法師」と墨書。内題「山家和哥集上（下）」。歌数は版本と同じ一五六九首である。印記「浮雪」「祐為之印」（朱）。

排列については、㈠380(374)・379(373)、㈡1011(996)・1010(995)、㈢1387(1368)・1386(1369)の各箇所が版本と異なっている。㈢の排列は陽明本系諸本と同じである。

本書は他の版本系諸本とはかなり異なる形態をもっている。

(1)、208(203)詞書「坊なるちこ是をきゝて」は、版本系諸本に共通して欠くが、本書はこれを本行に有している。

(2)、版本の開板に際して付せられたと思われる1111(1095)の前に位置する内題「山家和歌集下ノ下」が本書にはみられず、又、全く余白を設けずに前歌から連続して書写されている。

(3)、版本には下巻に十二カ所の校合注を有するが、二カ所を除いて、これを持たない。1338(1320)〔一カ所〕及び1359(1341)に校合注が付されているが、このあたり、本書には多くのイ本書入れがあり、むしろその方面からの書入れと思われる。

(4)、1388(1370)詞書の前に、松屋本を除く『山家集』諸本、「又ある本に」と注記があり、『山家集』の成立を考える上で、最も注意される箇所の一つであるが、本書ではこの語句の前に約三行分の余白を設けている。即ち、この本の親本乃至祖本に於てこれ以下の部分が追補された、その当初の面影をとどめているものと思われる。

(5)、巻末の百首中「述懐十首」の下に、版本系諸本「一首不足」と注記するが、本書はこの注記を持たない。（但し、歌の実数は他の諸本と同じく九首である。）

(6)、1557(1540)の下句は、版本系諸本「にしのことばにふさねたる哉」と次の1558(1541)の下句を目移りによって誤写しているが、本書は、この誤りを犯していない。因みに、陽明本で「にしのかとよりさとりひらかん」とある下句は、本書では「にしのかとよりさとりひらけん」とあって、この本文は、陽明本系第一類本C及び松屋本に一致している。

(7)、本文に関して一例を挙げれば、版本系独自歌に次の如き歌がある。

夜初雪

537月出る軒にもあらぬ山のはの
　しらむもしるしよはの初雪（525の次）

右の第五句は、他の版本系諸本では「よはの白雪」とあるが、詞書との照応からすると、本書の如くあるべきであろう。

以上の如き諸点からして、本書は版本を遡り得る、版本系諸本の中では比較的古い面影を伝える一本として注目されるのである。

前述した如く、版本にはかなり多くの誤りがみられるが、本書はそうした誤りを犯すことが少ない。例を掲げる。（括弧内は版本）

7(6)第三句　うへそへん（うへそへは）、206(204)初句　折にあひて（折におひて）、429(422)詞書　雁声遠近（鴈声遠を）、433(426)第二句　むつことつきて（むつことつわて）、482(473)初句　いとか山（いとゝ山）、560(547)第四句　煙に月

の（歴に月に）、733（718）第四句　いとふにたにも（いとふにたにみも）、793（779）詞書　堀川の局（堀川の房）、956（942）心をかねて（心をそかねて）、1012（997）第二句　そはのたつ木に（そはたつ木にを）、1144（1127）詞書　関に入て（さきにいりて）、1236（1218）詞書　二日かの社に（二日の社に）、1382（1364）第四句　かきこもりなんと（きこもりなんと）、1477（1459）第五句　いひちらさせて（いひちらせて）

一方、本書の本文には、版本系の本文とはかなり異なるものもみられる。

102（99）第五句　はなさくらかな（松屋本「花桜かな」・他本「山桜かな」）、430（423）第二句　つらきはみえて（松屋本「つらきはみえて」・他本「つゝきはみえて」）、484（475）第二句　聲よはかりし（版本、松屋本、多和本「声よはりにし」・他本「声よはかりし」）、515（504）第四句　ひをくゝるとは（松屋本、東甲「ひをくゝるとは」・神、天乙「ひをゝくりとは」・版本「ひをくるゝとは」・他本「ひをくゝりとは」）、1351（1333）第四句　岩のかけふむ（松屋本、松、京研「岩のかけふむ」・東甲「岩のかたふむ」・他本「岩のかとふむ」）

右の例によっても知られる如く、本書は基調は版本系の本文であるが、しばしば松屋本、あるいは陽明本系第一類本Cの本文に一致するものがあることが、注意される。殊に1058（1042）以下に於ては、その傾向が顕著である。すなわち、後述する如く、陽明本系第一類本Cの松・京研両本は、下冊に於て、版本系本文が多量にみられるのであるが、それは、本書の本文に近いものであったのである。ともあれ本書は、全体としてみる時、版本系諸本の中では、最も古い面影を伝え、版本の誤りをかなり是正することができる。その点に於ては、現在のところ、版本系諸本の中で最も注意すべき一本と考えられるのである。

本書にはイ本書入れがなされている。例を掲げる。

1（1）第五句　かなふ初夢、43（40）詞書　伊勢にもり山ふく山と申所に（イニ「伊勢のにしふく山と申所に」）、42（39）第四句　いりけん人に、155（153）初句　何となく、182（179）第三句　折にしも、274（269）第四・五句　露にも袖をそめてける哉、637（623）第五句　くまになるらん、1300（1282）初句　わりなしな

右のうち、1歌のイ本本文は、大倉精神文化研究所本及び穂久邇文庫蔵乙本にのみみられるものであり、182・274歌のイ本本文は、他に所見なきものである。637歌のイ本は松屋本のみにみられるものであり、1300歌のイ本は松・京研本にみられるものである。他は版本に一致するが、かゝる錯綜した姿を示す本書のイ本が、特定の一本によるものか、あるいは複数のものによるのか未詳であるが、いずれにせよ、他に所見なき詞句を含むところからみて、今日知られざる伝本が存したのであろうことが窺われる。

二、陽明文庫本系諸本

陽明文庫本は、版本の不備を補うところ少くない善写本として、版本に代って重視されるようになり、伊藤嘉夫氏によっ

て、昭和十六年『西行全集』の底本として用いられて以来、日本古典全書本、日本古典文学大系本、私家集大成本など、近年公刊された『山家集』の諸テキストに於て、いずれもその底本となっていることは、前述したとおりである。

次に、版本系諸本に対して、本系類に特徴的にみられる事項を概観しておくことにする。

まず、本系類には版本に欠く歌六首が存する。次にそれを一括して掲出する。

113の次　吉野山みねなる花はいつかたの
　たにゝかわきてちりつもるらん（111）

213の次　五月雨はいはせくぬまのみつふかみ
　わけしいしまのかよひともなし（209）

790の次　とりへのやわしのたかねのすゑならん
　けふりを分ていつる月かけ（776）

701の次　いかにしてうらみしそてにやとりけん
　いてかたくみし有明の月（887）

1157の次　なかれ出る涙にけふはしつむとも
　うかはんすゑを猶思はなん（1141）

1528の次　深き山はこけむすいはをたゝみあけて
　ふりにしかたををさめたるかな（1511）

歌の排列については、十六カ所にわたって版本との異同がある。次に一括して掲出する。本文並びに歌の冒頭に付した番号は版本のそれである。

（一）

〔きゝすを〕

33春の霞いゑたちいてゝゆきにけん
　きゝすたつ野をやきてける哉（36）

34かた岡にしはうつりしてなくきゝす
　たつはをとゝてたかゝらぬかは（35）

（二）

雨中柳

53なかゝくに風のほすにそみたれける
　雨にぬれたる青柳のいと（57）

柳風にみたる
柳乱風

54見わたせはさほのかはらにくりかけて
　かせによらるゝあをやきのいと（56）

（三）

〔花の哥あまたよみけるに〕

70しらかはの春のこすゑの鶯は
　はなのことはをきくこゝちする（79）

この歌は、69「しらかはのこすゑをみてそなくさむるよしのゝ山にかよふ心を」（72）の次に排列されている。

（四）

高野に中院と申所にあやめふきたる房の侍けるにさくら
　のちりけるかめつらしくおほえてよみける

202桜ちるやとをかされるあやめをは

はなさそふとやいふへなるらん（207）
坊なるちこれをきゝて
203ちるはなをけふのあやめのねにかけて
くすたまともやいふへかならん（208）
さる事ありて人のもの申つかはしたりける返事に五日
204をりにあひて人にわか身やひかれまし
つくまのぬまのあやめなりせは（206）

（五）

〔むしの哥よみ侍けるに〕
451秋のよをひとりやなきてあかさまし
ともなふむしの声なかりせは（459）
452秋のよにこゑもやすますなく虫を
露まとろまてきゝあかす哉（458）

又、第一類本以外では
453秋の野のおはなか袖にまねかせて
いかなる人をまつむしのこゑ（460）

が451(459)の前にあって、453(460)・451(459)・452(458)の歌順となっている。

（六）

〔千鳥〕
550しもさえて河ふけゆくうらかせを
おもひしわけになくちとりかな（564）

551さゆれともこゝろやすくそきゝあかす
かはせの千鳥ともくしてけり（563）

（七）

松風増恋
612いはしろの松かせきけは物おもふ
人も心そむすほゝれける（686）

右の歌は、版本では「恋」として一括された歌群中にあるが、陽明文庫本では、611(626)歌の次に、右の如き詞書を伴って排列されている。

（八）

〔恋〕
693いそのまになみあらけなるおりくはは
うらみをかつく里のあま人（709）
694せとくちにたけるうしほのおほよとみ
よとむとゝひのなき涙哉（708）

（九）

〔恋〕
707秋ふかき野への草はにくらへはや（723）
ものおもふころの袖の白露
708いかにせんこむよのあまとなるほとも
みるめかたくてすくるうらみを（722）

（十）

提婆品

883 いさきよきたまを心にみかき出て
いはけなき身にさとりをそえし（900）
884 これやさはとしつもるまてこりつめし
法にあふこのたきゝなりける（898）
885 いかにしてきくことのかくやすからん
あたにおもひてえける法かは（899）

（二）

〔題しらす〕

945 うつらふすかりたのひつちをひいてゝ
ほのかにてらすみか月のかけ（960）
946 あらしこすみねのこのまを分きつゝ
谷のしみつにやとる月影（959）

（三）

〔題しらす〕

992 うくひすはゐなかの谷のすなれとも
たひたるねをはなかぬなりけり（1008）
993 うくひすのこゑにさとりをうつきかは
きくうれしきもはかなかりけり（1009）
994 すきて行はかせなつかしうくひすに
なつさひけりな梅の立枝に（1007）

（三）

天王寺へまいりたりけるに松にさきのゐたりけるを月の
ひしゆにみてよめる
1076 にはよりはさきゐる松のこすゑにそ
雪はつもれる夏の夜の月（1094）
夏熊野へまいりけるにいはたと申所にすゝみて下向しける人につけて京へ西住上人のもとへつかはしける
1077 まつかねのいはたの岸の夕すゝみ
君かあれなとおもほゆるかな（1092）
かつらきをすき侍けるにおりにもあらぬもみちの見えけるをなにそととひけれはまさきなりと申けるを聞て
1078 かつらきやまさきの色は秋にゝて
よそのこすゑはみとりなる哉（1093）

（四）

なとり河をわたりけるにきしのもみちのかけをみて
1130 なとり河きしのもみちのうつるかけは
おなしにしきをそこにまつしく（1148）
十月十二日ひらいつみにまかりつきたりけるにゆきふりあらしはけしくことのほかにあれたりけりいつしか衣河みまほしくてまかりむかひてみけりかはのきしにつきて衣河の城しまはしたることからやうかはりてものをみる心ちしけりみきはこほりてとりわきさへけれは
1131 とりわきて心もしみてさえそわたる
衣河みにきたるけふしも（1149）
又のとしの三月に出羽国にこえてたきの山と申山寺に侍

けるにさくらのつねよりもうすくれなゐの色こき花にて
なみたてりけるをてらの人〳〵も見けうしけれは
1132 たくひなきおもひいてはのさくらかな
うすくれなゐの花のにほひは（1150）
下野国にてしはのけふりをみて
1133 みやこちかきをの大はらを思出る
しはのけふりのあはれなるかな（1147）

（五）

〔恋百十首〕

1313 今はわれ恋せん人をとふらはん
世にうきこと〻おもひしられぬ（1332）
1314 なかめこそうき身のくせに成はて〻
夕くれならぬおりもせらるれ（1331）（第五句版本「別ね」）

（六）

〔はなまいらせけるをりしもをしきにあられのちりけるを〕
1368 いはにせくあか井の水のわりなきに
心すめともやとる月哉（1387）
大師のむまれさせ給たる所とてめくりのしまはしてそのしるしにまつのたてりけるをみて
1369 あはれなりおなしの山にたてる木の
かゝるしるしの契りありける（1386）

次に、本系類諸本のうちお茶の水図書館蔵乙本、京都大学国文学研究室蔵本を除く諸本に奥書を有する。学習院大学国文学研究室蔵本は下冊を欠くので、奥書の有無は不明である。

まず、陽明文庫本の奥書には次の如くある。

(A) 以上哥数千五百五十三首
本云一千五百七十二首云々
凡此書本落字僻字太多之又不審哥
繁多也忌可授証本
今山家集之外又有山家心中抄彼略校
此集内書出者也

右の「授証本」は、他本を参照してみると「校証本」であろう。「忌」は本書と書陵部蔵乙本以外は「志」と作っている。「内」は書落としたものを後から補っている。

この(A)の後に、さらに次の奥書を有する一群の伝本が存する。書陵部蔵乙本によって掲出する。

(B) 西行法師 俗名範清 号佐藤兵衛尉
建久元年二月十五日入滅之由見隆信朝臣集也

右の「見隆信朝臣集也」の「見」の文字は、書陵部蔵乙本及び多和文庫蔵本のみにみられるものである。藤原隆信は、山岸徳平氏が『山家集』の編者に比定された人物である。（「流布本山家集は藤原隆信の編か」『和歌文学研究』第二十一号）

(A)(B)の後に、さらに細川幽斎によって書写校合の行なわれたことを示す奥書をもつ伝本がある。天理図書館蔵乙本によって掲出する。

(C) 此山家集密〻申出

禁裏御本遂書写校合早尤
可為證本乎
干時文禄三年季春上瀚
玄旨判

すなわち、細川幽斎（玄旨）が、文禄三年に禁裏御本を書写校合した系統の本である。現存伝本を奥書によって分類してみると、次の如くである。略称によって掲出する。

(A)　陽
(A)(B)　書乙・松・関甲・日・市・天甲・茶甲・京・筑・多
(A)(B)(C)　関乙・東洋・天乙・神宮・書丙

本系類に属する伝本を、奥書・本文・歌の排列・歌の出入りなどによって、四類に分類した。第三類までは、高城功夫氏による分類に大略従っている。（『山家集諸本の研究』㈠）多和文庫本は他と著しく性格が異なるため、これを別にし、第四類とした。本系類諸本には、第一類本A（陽・学）を除く諸本に、勅撰集の集付がみられる。版本系諸本には、書乙本と同一の一本による校合がなされている東京都立中央図書館蔵本以外には、勅撰集の集付はみられない。

『山家集』からは贈答歌に於ける他人の詠を含め約二百首の歌が勅撰集に入集しているが、このうち、書乙・松・京研・関甲・東洋・市・天甲・茶甲・京・筑・天乙・神宮・書丙・茶乙・多の十五本には十八～二六首の歌について、又関乙・日・松屋本の各本には、さらにその数倍の歌についての集付がなされている。

書乙本以下十五本の集付にみられる大きな特徴は、集付が『玉葉集』までのものであることである。すなわちこの集付は『玉葉和歌集』から『続千載和歌集』に至る間、南北朝頃付されたことを知るのである。

ただ、この集付は綿密になされているわけではなく、巻初より二百首目あたりまでは比較的丹念に付されているが、それを越えると数首にとどまっている。

関乙・日・松屋本の三本は、勅撰集最後の『新続古今和歌集』まで、ほぼ全体に満遍なく集付を付している。勅撰集入集歌で、この三本が共通に見落としているものは、約十首である。

本文については、伊藤嘉夫氏が、版本の不備を補い得る点を指摘されている。（『寂西行法師全歌集』昭和十年二月大岡山書店刊、三二〇頁―三二五頁。主として天理乙本に拠っておられるが、左記の点に関しては、陽明本も事情は同じである。）

その主要な点を摘記させていただくと、

(1) 791(777)歌は版本では790歌を欠いて、意味不明であったものが、陽明本によって790の次(776)歌「とりへのや」を得て、この疑問が解ける。

(2) 208(203)歌「ちるはなを……」は、版本では詞書を欠いていたが、陽明本で「坊なるちこれをきゝて」という詞書を得て、他人詠であることが判明する。（都・三には詞書がある。）

(3) 498(488)歌の前に「暮秋」の詞書を得る。

(4) 624(609)詞書中、版本で「ひと〳〵」とあった箇所が陽明本では「隆信なと」とあり、より具体的になる。

(5) 686(612)「いはしろの……」は、版本では「恋」と題された六十首の歌群の中に一括されていたが、陽明本では「松風増恋」の詞書のもとに626(611)の次に位置している。

(6) 817(802)の左注「かくおもひて程へ侍にけりと申て返事かくなん」を版本は欠いている。

(7) 551(538)歌の下句、版本は「山へは雪そ哀也ける」とあるは、陽明本には「雪あはれなるふかくさのさと」とあり、これは『万代集』入集の同歌とも字句が一致し、古伝を証するものである。

(8) 1557(1540)歌の下二句を版本は目移りによって誤刻しているが、これは陽明本によって正される。(三は誤っていない。)

伊藤氏の指摘された点に、もう二・三付け加えるならば、次の如きものがある。

486(477)詞書、版本「寂蓮高野に詣てふかき山の紅葉と云ことをよみける」とある「寂蓮」は、陽明本をはじめ『山家心中集』、『西行法師家集』などにもある如く「寂然」とあるべきであろう。寂然は西行の年来の心許した友である。

又、1111(1095)歌の詞書の中で、版本は西行が仁和二年(『玉葉和歌集』『夫木和歌抄』『西行法師家集』などには三年とある)四国の方へ旅をした由を記しているが、仁和は九世紀末の年号であり、陽明本の如く仁安とあるべきである。(但し、本系類本のうち、仁安とあるのは、陽明本及び書乙本のみで、他はすべて仁和としている。)

同様の例はもう一例あって、1236(1218)詞書に「承和元年六月一日院熊野へまいらせ給けるついてに云々」と版本にはあるが、「承和」は九世紀中葉の年号であり、陽明本にみられる如く承安とあるべきである。

次に分巻の次第をみると、版本が上下二巻であったのに対し、

上巻　一～五七七(版本番号　一～五九一)四季
中巻　五七八～一〇四一(〃　五九二～一〇五七)恋雑
下巻　一〇四二～一五五二(〃　一〇五八～一五六九)雑

となっている。中巻と下巻は、「題しらず」として一括された未整理部分が終るところで区切られている。

又、版本系諸本が、内題をすべて「山家和歌集」とするのに対し、本系類諸本は、内題を「山家集」とすることが、一つの特徴である。

次に、六家集として合集された伝写本は多くが本系類に属するものであることが注意される。管見に入った範囲では、書陵部蔵甲本などが版本系の本文をもつものであるほかは、陽明文庫本、書陵部蔵乙本及び丙本、天理大学蔵甲本、関西大学蔵甲本、京都大学附属図書館蔵本、筑波大学図書館蔵本、神宮文庫蔵本など、多くが陽明本系の本文を有している。

最後に、左注に関する書写形態について付言する。『山家集』には、九箇所にわたり十種の左注が存在する。それらは、105(102)、764(749)、817(802)、829(814)、942(928)、1146(1129)、1181(1164)、1368(1350)〔二種〕、1389(1371)の各歌である。これらの歌の左注は、しばしば次の歌の詞書と連続して書写されていて、文意をわか

りにくいものとしている。

陽明本・書陵部乙本・関西大学乙本・天理甲本・神宮文庫本・天理乙本の各本は、次の歌の詞書と繋ってしまっているのは、一カ所だけで、左注の表記に関しては比較的整備されている。市岡氏本の二カ所がこれに次ぐ。反対に、京大研究室本は七カ所、松平文庫本は六カ所、筑波大本は五カ所にわたって、次の歌の詞書と繋って表記されており、日本女子大本、多和本、版本の四カ所がこれに次いでいる。総じて、第一類本C、第二類本C、第四類本など、版本本文の流入の割合の高いとみられる本が、左注の表記に関しては、比較的整備されていないという事実を知るのである。

第一類本

A　陽明文庫蔵〔江戸初期〕写　三冊

淡黄蘗色無地表紙、二五・八×二〇・五糎。字面高さ約二十二・五糎。毎半葉十行。墨付上冊四八丁、中冊四一丁、下冊五一丁。外題、表紙左肩に「山家集上（中、下）」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)。印記「陽明蔵」（朱）。歌数一五五二首。うち贈答歌に於ける他人の歌七七首。

本文をみると、本書が本系類に於て、現在のところ祖本に近い位置に立つものであることが窺われる。注意されるものについて、幾つか例示する。

	陽	学	書乙	松	京研
82(79)初句	なにとかや	なにとかや	なにとはや	なにとはや	なにとはや
92(89)詞書	きたり	きたり	きたりたり	きたりたり	きたりたり
222(217)注記（ナシ）			河澪標事	河澪標事 漂枠	河澪標事 漂枠
300(295)第五句	あきせみの こゑ	あきせみの こゑ	秋せきの こゑ	秋せきの こゑ	秋せきの こゑ
768(753)作者（ナシ）			あそひたへ	あそひたへ	あそひたへ
912(898)注記（ナシ）	ナヽタリノ	ナヽタリノ	ナヽタリノ	ナヽタリノ	ナヽタリノ
912(898)第二句	こをやしな ひに	こをやしな いに	うをやしな ひに	うをやしな ひに	うをやしな ひに

右の、82、92、300などの例をみると、本来陽・学の如くあったものが、誤写されていったものかと思われる。222の例なども、本来なかったものが、注記的に書き加えられていったものであろう。912注記などを見ると、中でも陽明本が先行するものであろうことが窺われる。

本書は、かく本系類本中の祖本に最も近い位置にあると思われるものであるが、惜しむらくは誤写が多い。試みに、巻初より百首目までにみられる、陽明本独自異文を抽出してみる。（本文は陽明本、傍記したのは版本の本文である。）

8(7)詞書　山さとに春立と云事を　20(18)第五句　わかなゝりけり　23(21)のへのかすみに　24(22)詞書　老人のわかなと云事を　25(23)詞書　寄覚若菜述懐と云事を　26(24)第五句　あけほのゝ山こゑ　28(26)初句　鶯の　36(33)初句　春の霞なし　38(35)第二句　人をこそまて　81(78)第三句　たてまつるれ

94(91)第二句　散(こゑ)にそむらん

右のほとんど全部が、誤写に基づくものであることは、明らかである。陽明本が如何に誤写の多い本であるかをみることができる。

同じ範囲について陽明本と同系の学習院大学本について、独自異文の例を掲出すると、(傍記は他本に共通の本文)

35(34)第二句　しはうつりきて(し)　59(56)詞書　待花忘日(他の第一類本「田」、第二類本「時」、版本「他」)　72(69)第二句　こすゑにみてそ(を)　73(71)第五句　ひるなかるらん(らな)　99(96)詞書　山寺の花さかり成けるを(に)(後略)

陽明本に比して、誤写はかなり少ない。従って陽明本をもって本系類の最善本とするのは、必ずしも当を得たものとは思われない。それにつけても、学習院本は現存するのが上中冊のみで下冊を欠くことが惜しまれるのである。

陽明本に誤写の多いことは、「花」と「春」の誤写に関して、典型的に現われている。

次に、それらの例を陽明本の本文をもって掲げる。(傍記及び括弧内に付した番号は版本。)

112山おろしのこのもとうつむ春(花)の雪は
　いは井にうくもこほりとそみる(114)

149おほつかなはな(春)は心の春(花)にのみ
　いつれのとしかうかれそめけん(151)

153なにとかくあたなるはる(花)のいろをしも
　心にふ(か)くそめはしめけん(155)

174かきりあれはころもはかりはぬきかへて
　こゝろははる(花)をしたふなりけり(176)

188ほとゝきすきかぬものゆへまよはまし
　春(花)をたつねぬ山路なりせは(191)

988さらに又かすみに暮る山路かな
　春(花)をたつぬるはな(はる)のあけほの(1003)

1072こゝろさしふかくはこへるみやたてを
　さとりひらけん春(花)にたくへよ(1088)

1073吹みたる風になひくとみる程に
　春(花)をむすへる青柳の糸(1089)

右のうち、114を除いては、「春」と「花」の語に関しては、陽明文庫本系類の中で陽明本のみが右にみられるような独自異文となっている。114に関しては、第一類本のみ学「春(花)」・書乙「春」・松「春(花イ)」・京研「春(花イ)」とあり、他の諸本では「花」となっている。この114は、「落花の歌あまたよみけるに」として一括されている歌群中にある一首であるが、この歌群の歌をみると、他の歌はすべて「花」か「さくら」の語を詠み込んでおり、この場合も、「花」とあるべきところであろう。他の歌において、陽明本本文が誤写によるものであることは、歌意からして

明らかであろう。すなわち、この誤写は、依拠本乃至祖本における「はる」と「はな」の「る」「な」の草体の字形の類似に起因するものと思われる。現行諸テキストも、上記の例に関し、版本等によって改めている箇所もあるが、多くは陽明本本文の誤りをそのまま踏襲している。

学習院大学国文学研究室蔵〔江戸中期〕写　二冊（欠下冊）

（存上、中冊）濃紺地花卉文様空押表紙、十四・三×十九・六糎。料紙、鳥の子。字面高さ約十三糎。毎半葉十二行。墨付上冊六十六丁、中冊六十丁。表紙左肩に子持枠付白紙短冊を貼付、「山家集上（中）」と墨書。内題「山家集上（中）」。第一葉白紙裏に「鳥羽院北面左兵衛尉藤原憲清鎮守府将軍／秀郷九代末孫秀清孫康清一男」との記載がある。

歌数・歌の排列、版本との関係などは、陽明本の場合と一致する。所収歌は、上巻五七七首、中巻四六四首、計一〇四一首である。

本書は前述した如く、本文を陽明文庫本と共有する。そして、誤写の数は陽明本に比してかなり少ない。仮名遣いにはまま誤りがみられるが、全体として眺める時、誤写が少ない点では、むしろ陽明本に優る善本であると認められる。

B　書陵部蔵〔江戸中期〕写　三冊　乙本

〔函架番号　五〇一・五一一〕

香色無地表紙、二十九・五×二十一・七糎。字面高さ約二十二・五糎。毎半葉十行。墨付上冊四十丁、中冊三十五丁、下冊四十一丁。題簽、表紙左肩に「山家集上（中、下）」。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)

本書は、(一)、458(452)・459(451)、(二)、708(694)・709(693)が版本と同一の排列を示すほかは、陽明本の排列に一致する。歌数は陽明本と同じ一五五二首である。

本文は、第一類本の中で、しばしばAとCの中間的形態を示す。すなわち本書は、Cとの間にしばしば共通異文を有するが、Cも又独自異文を有し、本書はいわばCの松・京研両本に対し前過程的な形態を示すのである。但し、Cは後述する如く、下冊に於て版本的性格を濃厚にしていくので、下冊についてはこの限りではない。陽明本・本書・松平本の本文を対照して、次に数例を掲げる。

	陽明本	本　書	松平本
161(159)初　句	あとたえて	あとみえて	あと見えて（たイ）
270(265)詞　書	野徑	野徑秋風	野徑草花
300(295)第五句	あきせみの こゑ	秋せみの（の蟬かな） こゑ	秋せきの こゑ
327(321)第三句	をゝしさは	をゝしさは（さはゝイ）	をかしさは
616(601)第三句	我袖も	わか袖も	我宿は（袖イもイ）
705(690)第五句	そこの心を	底のふかさ（コ、ロヲイ）	底のふかさ を

1160(1144)詞　書　　火あふきに　　火あふきに　　局に

C　島原公民館松平文庫蔵〔江戸前期〕写　三冊

茶褐色無地表紙、二十八・七×二十一・二糎。字面高さ約二十一・五糎。毎半葉十行。墨付上冊四十九丁、中冊四十五丁、下冊五十一丁。題簽、表紙左肩に「山家集上（中、下）」。内題「山家集上（中、下）」。印記「尚舎源忠房」。奥書(A)(B)。

歌の排列については、上巻は陽明本と同一であるが、中・下巻に於て、次の如き相異を示す。すなわち、(一)708(694)・709(693)(二)1092(1077)・1093(1078)・1094(1076)　(三)1147(1133)・1148(1130)・1149(1131)・1150(1132)　(四)1331(1314)・1332(1313)の各項の排列は、版本に一致する。又、陽明本独自歌1528の次歌、

深き山は苔むす岩をたみあけて
　ふしにしかたをおさめたる哉（1511）

は、本書と次述する京研本のみ、1529(1512)の次に位置して、やゝ特異な形態を示している。

本書は1091(1075)の後に、次の歌を行間に書入れている。

1094にわ鳥はさきゐる松の梢にそ
　雪はつもれる夏の夜の月（1076）

ところが、このあたりは、版本と同様の排列になっており、この歌は、本行に既に存する。従って、1094は重出することになるが、かかる現象をみた理由は、陽明本系第二類本系の本文によって、このあたりが校合されているからである。すなわち、前述した如く、陽明本系では1091(1075)の次に1094(1076)が排列されていたために、かかる重出を生じたのである。因みに、この書入れは別筆であって、本行では「庭とりも驚居る松の梢より雪は積れる夏の夜の月」となっている。

さらに、本書には、陽明本に欠いていた、1113(1096の次)、1168(1151の次)、1235(1217の次)の三首が存する。これは下巻に於て、版本系の本文の流入をみることと密接に関連する。以上によって歌数は、陽明本より三首多い一五五首、書入れ歌一首である。

下巻には、四カ所に付箋が施され、次の如く記されている。

1114(1097)詞書二行目「都に帰けるに」とある上に「是迄落ル」

1168(1151の次)詞書一行目「松の木のまよりわつかに月影ろひけるをみて」の上に「写本是より落」、又、同歌の上に「是迄」

1375(1357)詞書の上に「写本一行落ル」

1463(1445)詞書二行目「の咲たりけるをみてなしのほしきよしをねか」の上部に「写本一行落ル」

右の1114(1097)付箋については、陽明本系諸本1113(1096の次)を欠くが、さらに1114(1097)詞書までを欠く本が存したのであろう。松屋本も1114詞書までを欠き「此間哥落たる歟」と注記している。1168詞書の付箋については、陽明本系諸本が1168を欠く事実を指しているものと思われる。1375及び1463の付箋については、第二類本が、1375詞書及び1463詞書のうちの陽明本で第二行目に相当する一行分を欠いている。（但し、日本女子大本は1375詞書を有し、1463詞書一行を欠く。又神宮文庫本・天理図書館乙本・書陵部丙本は1375詞書を欠き1463詞書を有する。）総じて本書下巻にみられる

付箋の注記は、第二類本系のものであることが知られるのである。

次に本文をみると、全体に次述する京研本との共通異文を多く有するが、特徴的なことは、下巻、すなわち、1058(1042)以下の本文が、しばしば版本系の、殊に三手文庫本の本文に一致することである。このことは歌の排列にもみられたとおりである。

京研本との共通異文には例えば次の如きものがある。(傍記は陽明本)

21(19)第四句　はなはわかなる　602(587)詞書　後朝・橘花　630(616)詞書　寄月恋(なし・なし)(京研本「寄月窓歟」と作る)　885(870)詞書　月見思面・西(松平本は見消ちして正す)　1236(1218)詞書　…六月百・院熊野へ(一日)(松平本、見消ちして朔日と正す)　1439(1421)第五句　あられける哉・みを(松平本、「身をイ」とす)

又、1090(1074)詞書、京研本「又のとし…」以下、松平本「のとし…」以下を欠いている。これら共通異文の多くは、誤写によるものと思われる。松平本ではこれらをしばしば見消ちして訂正している。

イ本校合は約二百カ所についてなされている。ここで校本として用いられているのは、本系類第二類本である。

次に三手文庫蔵本に一致する本文の例を掲げる。

1075(1059)第五句　谷川の水(三「谷川の水」・版「山川の水」・陽「山河の水」)、1187(1170)第二句　吹くる雨の(三「吹くる雨の」・版及び陽「ふりくる雨の」)、1299(1281)第三句　うらむへき(三「うらむへき」・版及び陽「とかむへき」)、1333(1315)第五句　人を思ひて(三「人をおもひて」・版「人をおもへは」・陽「人もおもへは」)

京都大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写

綴葉装、三冊。厚手鳥の子元表紙、木賊色草花模様裂改装表紙、二十三・三×十七・六糎。見返し、金泥蝶雁鶴等飛翔模様。料紙、鳥の子。字面高さ約十九糎。毎半葉十行。墨付上冊三十五丁、中冊四十四丁、下冊四十八丁。外題、元表紙中央上部に「山家集上(中、下)」左肩に「西行歌集」と墨書。内題「山家集上(中、下)」。奥書なし。印記「立習文庫」。

前述した如く、本書は松平文庫本と同系統に属し、歌の排列も一致する。但し、本書は上巻巻末443(436)～591(577)を脱落している。従って、歌数は松平文庫本より一四二首少ない一四一三首である。松平本にみられた書入れ歌は、本書にはない。

本文も松平文庫本に酷似する。本書と松平本の本文を比較すると、約四十カ所に相異が見出されるが、その殆んどは、両本いずれかの誤写乃至誤脱と認められる。

本書にもイ本書入れがみられる。それらを松平本と比較してみると、共通するものとしないものとがある。すなわち、原写本に記されていたと思われるものと、それぞれが別個に校合したと思われるものとの、二通りが考えられるのである。従って、校合のなされている箇所が両本で異なる場合がしばしばみ

られる。又同一語句に校合注が付されている場合でも、一方にイ本注記があって他方にはみられない場合、あるいは「―歟」と注記されている場合がある。

全体としてみると、イ本校合のなされている箇所は、松平本より少ない。殊に下冊では、松平本が下冊に入ると、いちだんとその数を増すのと対照的に、その数を減じるのである。しかも、そのわずかの例が、松平本と共通するものである点をみると、原写本においてイ本校合の付されている数が少なかったのであろう。

松平本との親近関係は、本書の上・中巻が、松平本と、行格を同じくすることによっても窺われる。

第二類本

A　関西大学図書館蔵〔江戸前期〕写　三冊　甲本

〔函架番号九一一・二三八・S二・一―一／三〕

（六家集十九冊のうち）淡黄蘗色無地表紙、二十八・六×二十・五糎。毎半葉十行。字面高さ約二十二・五糎。墨付上冊四十三丁、中冊四十二丁、下冊五十一丁。外題、表紙左肩に「西行法師家集上（中、下）」と墨書。同右下に、やや小字にて「山家集」。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。印記「岡田真之蔵書」。三冊それぞれ別筆である。

まず、第二類本にみられる特徴を、陽明本と対比して記しておくことにする。

歌の異同に関し、大量の脱落歌を有することが、第二類本の特徴である。すなわち、175(173)、328(322)～343(337)の一丁分、822(807)詞書後半～830(815)の一丁分、1505(1487)の各歌を欠き、さらに、第二類本Cのみ、79(70)、764(749)の二首を欠いている。また、763(748)、764(749)には左注が付されているが、途中の一行分が脱落している。

328～343については、天甲本・市岡氏蔵本が、又、822～830については、筑波大本が、それぞれ前後改丁箇所に当っており、ちょうど各一丁分の脱落であることを示している。かかる書写形態によっても、又殊に後者については、822(807)詞書の前半「とかくのわさはてゝあとのことゝもひろひて」から、831(816)詞書「返し」に繋ってしまっている点をみても、これらの部分が本来存したものであるにかかわらず、転写の過程で脱落したものであることは明らかである。

歌の排列に関しては、460(453)・459(451)・458(452)の歌順が、第二類本及び第三類本に共通してみられ、陽明本と異っている。第二類本B（関乙・東洋）では、さらに978(964)が、本来の位置になく、中巻末すなわち1057(1041)の次に書写されている。

第二類本の奥書は、陽明本と同一の奥書を記した後に、前述した奥書(B)の部分「西行法師俗名範清……」が書き加えられているが、第二類本Bとして分類した関乙・東洋の二本は、さらに奥書(C)の部分「此山家集密々申出……」が加えられている。しかしながら、本文は、第二類本系のものであり、高城氏が注意されているように、恐らく第三類本より、奥書のみ転写されたものであろう。

本文に関しては、第二類本に共通する異文も、ままあるが、しばしばみられる現象は、第二類本の中でも、A・BとCとでは、本文に相違がみられることである。さらに、Cの中で、市・天甲・茶甲・京・筑の五本、そこから市本を除いた四本、京・筑の二本、又、Bとして分類した関乙・東洋の二本には、しばしば共通異文が見出される。そして、これらの諸本の中では、関甲・日の二本が、最も陽明本に近い本文を有している。ただ、この二本の間に、直接の承接関係を想定することは困難である。その関係は、次の如き兄弟の関係に立つものであろう。

第一類本──第二類本A──第二類本B
　　└──第二類本C

次に、第二類本には、殊に第二類本Cには、版本に一致する本文がかなり見出されることが、一つの特徴である。次に版本の本文に一致する例を掲げる。

29(27)詞書「……なりにけれは」(第二類本全部。陽「なりけれは」) 85(82)初句「のとかなる」(第二類本C。陽「長閑なれ」) 102(99)詞書「……としたゝ」(第二類本C。陽「……としたか」) 154(152)第二句「なへて梢に」(第二類本全部。陽「なめてこすゑに」) 157(155)第三句「木にそ咲」(日を除く第二類本C。陽「木こそさく」) 222(217)第三句「みおつくし」(日を除く第二類本C。陽「みをしるし」) 1567(1550)第五句「たゝよふやなそ」(関甲及び日を除く第二類本。陽「よしやなそ」)

さて、本書の問題に返って、まず歌の異同に関して陽明本と比較してみると、175(173)、328(322)〜343(337)、822(807)〜830(815)、1505(1487)の各歌を本書は欠いている。これらは二類本に共通してみられるものであった。その他、413(407)の次に、410(404)〜413(407)の四首を重出している。これは、全く不用意の重出というべく、重出歌には「イヤカキ」と注記されている。又、第二類本Cに欠いている79(70)、764(749)の二首を本書は有している。以上によって歌数は一五二九首であり、うち四首が重出歌である。

歌の排列については、460(453)・459(451)・458(452)の歌順は、第二・三類本に共通のものであり、1416(1398)・1415(1397)の歌順は、本書独自のものである。

本文は、前述した如く日女大本と共に陽明本に近似するが、両者を比較すれば、本書の方がさらに近い。従って、第二類本の中では、本書が最も陽明本の本文に近いといえるのである。

B　関西大学図書館蔵〔江戸中期〕写　一冊　乙本
〔同九一一・二三八・S二・四〕

浅縹色地草花模様表紙、二十六・二×十八・五糎。宇面高さ約二十一糎。毎半葉十行。墨付百三十八丁。外題、左肩に「山家集」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)(C)。印記「岩崎美隆文庫」(朱)「紀氏蔵書」(朱)。第二丁オに岩崎美隆の次の識語がある。(朱)

「此本は京人紀ノ氏辰といふひとの貞享ノ比の人もちしよし天保／十

四卯年なにはの書商人の手より伝たる也かくてまたことし／和泉国田分人尾崎正明のもたれたる古写本をかりてかたはらに／朱もてかきくはへつ天保十五辰のとしの九月十二日／岩崎美隆

まず歌の異同に関して陽明本と比較すると、陽明本に欠く版本独自歌二十三首のうち、約半数を校本によって補入している。それらは11(9の次)、37(34の次)、179(176の次)、196(192の次)、211(206の次)、220(215の次)、317(311の次)、467(458の次)、502(491の次)、541(528の次)、805(790の次)、989(974の次)の各歌、計十二首である。

さらに陽明本系の中でも二類本に共通に欠く歌のうち、175(173)、328(322)、330(324)～338(332)、340(334)～343(337)、822(807)～830(815)の各歌を行間または眉上に補写している。339(333)が補入されていないのは、校本が日本女子大本と同一系統に属する一本であったためと思われ、329(323)、1505(1487)の補入がないのは、転写の際の書落しであったかとも推定される。

609(594)～619(604)の一丁分十一首の脱落は本書特有のものである。それらは他本によって眉上に補入されている。686(612)は、626(611)の次の位置に存するほか、685(671)の次の位置にも、他本によって補入され、重出している。978(964)は当該位置にはなく、中巻末、即ち、1059(1043)の次に「イ本」と注記して書入れている。但し、これは本文と同筆であり、同時に「イナシ」と朱の注記があるところからして、校本からのものではなく、書落しに気付いた本書又は依拠本の筆写者が他本よにって書入れをしたものであろう。

764(749)には「イナシ」と注記がある。同歌を欠くのは、第二類本Cである。又、1357(1339)は、1363(1345)の次にも「イ」と注記して行間に補写されている。この排列に一致するものは、現存諸本の中では、日本女子大本のみである。そして、排列のみならず、本文も一致することにより、イ本は日本女子大本と同一系統に属する一本であることが知られるのである。

以上によって、歌数は一五一四首、書入れ補入歌は四九首、この書入れしたもののうちの二首は、本行にすでに存するものを重出したものである。これらの書入れは、すべて朱筆によってなされている。

歌の排列については、陽明本と比較すると、㈠460(453)・459(451)・458(452)、㈡507(496)・506(495)の二カ所に相異がみられる。前者は第二・三類本に共通にみられるものであるが、後者の排列は本書独自のものである。

本文は、他の第二類本系諸本と共通するものが多いが、そうした中で、本書が次述する東洋大本と共に、第二類本Aあるいは C と異る本文を示すことがままみられる。数例を挙げる。

27(25)第二句　声もかすみに（他本「こゑそかすみに」）

82(79)第三句　花をえたる（書乙「名もえたる」他本「名をえたる」）

100(97)第四句　此里まてや（版本「木の下にてや」・他本「このさとにてや」）

1480(1462)第五句　いりてはてぬる（他本「入て出ぬる」）

但し、東洋大本には右のイ本書入れはない。

さて、本書は岩崎美隆が日本女子大本と同系の一本で対校し、朱で校合を加えている。その方法に二通りあって、その一は、校本に加えられている校合注をそのまま転写したものであり、他の一は、校本の本文を本書の本文と対校して、異なる部分を傍書しているものである。ともに「イ」として同一注記を附している。

本書は集付をもつが、これも当初より存したもの（本文と同筆、墨書）と、校本より転写されたもの（朱書）の、二通りがある。

書入れ補入歌も、おおむね日本女子大本と同系の一本より転写している。日本女子大本では220(215の次)歌は218(214)の次に位置しているが、本書でも、それと同じ位置に220(215の次)を書入れている。

巻末には、日本女子大本巻末に記載されていた『山家集』に見えざる勅撰集入集歌と同一のものが、そっくり朱にて転写されている。

東洋大学図書館蔵〔江戸中期〕写　一冊

薄茶色縦横刷毛引模様表紙、二十五・九×一九・二糎。字面高さ約二十二・五糎。毎半葉十行。墨付百三十四丁。外題、表紙左肩に「山家集」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)(C)。

本書には、529(518)～723(707)歌の数丁にわたり錯簡がみられる。

歌の異同に関しては、陽明本系が欠く版本独自歌をすべて欠き、又第二類本が欠く175(173)、328(322)～343(337)、822(807)～830(815)、1505(1487)の各歌も同様に欠いている。そして79(70)、764(749)を有する点は第二類本Cと異なり、同Aと共通する。又978(964)を当該位置に書落して1057(1041)の次に「イ本」と注記して書写している点が、第二類本Aと異なるのである。以上によって歌数は、一五二五首である。

歌の排列も関乙本に一致する。

本文は関乙本の項で述べた如く、同本との間にしばしば共通異文を見出すことが一つの特徴である。

C　日本女子大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写　一冊

縹色無地元表紙、青色燭台形文様鳥の子改装表紙、二十七・五×二十・五糎。料紙、薄様。字面高さ約二十二糎。毎半葉十二行。墨付百二十五丁。（但し、百十六丁オより、勅撰集入集歌で、本集に見えざる歌を収録。）題簽、元表紙左肩に「山家集　西行　全」。内題「山家集」。奥書(A)(B)。歌の上部に朱点を付す。

まず、第二類本Cにみられる歌の異同につき、その特徴を記しておく。175(173)、328(322)～343(337)、822(807)～830(815)、1505(1487)の各歌を欠くことは、第二類本共通にみられるものであるが、さらに79(70)、764(749)の二首を欠いているのが第二類本Cにのみみられる特徴である。

しかしながら本書は、歌の異同に関しては、他の第二類本とは著しく異なる様相を示している。それは、版本系の本によって歌が大量に補入され、しかもその多くが本行化されている為である。

次に、陽明本に欠き、本書に存する歌を掲げる。

※5(4の次)、11(9の次)、※179(176の次)、※196(192の次)、211(206の次)、※220(215の次)、※317(311の次)、※420(413の次)、※462(454の次)、※467(458の次)、※491(481の次)、※502(491の次)、※537(525の次)、※541(528の次)、805(790の次)、989(974の次)、1023(1007の次)、1113(1096の次)、1168(1151の次)、1235(1217の次)

右のうち、※印を付した十二首には、「イ」の注記が歌の末尾に付されている。すなわち、「イ」の注記は、上巻のみに付されているのである。陽明本に欠き版本に存する残りの歌三首のうち、589(575の次)、596(581の次)の二首は本書にも欠き、37(34の次)は、細字で書入れされている。

又、第二類本のみに欠く歌のうち、175、328〜338、340〜343、822〜830の各歌は、本行に存する。(175のみ「イ」の注記あり。)764、1505歌の二首は、本書にも欠き、79(70)は72(69)の次に細字で補入されている。第二類本に欠く328〜343一丁分が本書には存するが、このうち339(333)のみを欠いている。これは、関乙本の眉上書入れ歌に、同歌を欠いていることと共通する。

又、陽明本系諸本、686(612)が626(611)の次に位置しているが、本書では、626(611)の次及び685(671)の次、即ち版本と同位置にそれぞれ本行に重出する。これも、版本系の本による補入の結果と思われる。従って、626(611)の次では陽明本と同一の本文であり、685(671)の次では、版本と同一の本文であるという相異をみせている。

以上によって、本書の所収歌は、一五六九首である。これには重出歌一首を含み、他に書入れ歌二首がある。

歌の排列に関しては、前述した如く、686が版本と同位置にも存し、又460・459・458の歌順が他の第二類本と同一のパターンを示すほか、㈠220(215の次)・219(215)、㈡1357(1339)→1363(1345)の次、の二箇所に本書特有の排列が表われている。220(215の次)は、陽明本系諸本にほぼ一致して欠く歌であるが、本書に書入れをする際に、位置を間違えたものであろう。

本文は、全体としてみると陽明本系第二類本としての特徴を示すが、他の第二類本Cの諸本が、版本と同一本文、あるいは共通異文を示す時に、しばしば本書のみが、あるいは本書と次述する市岡氏蔵本の二本が、陽明本の本文に一致することがある。次に、本書のみが陽明本本文に一致する場合を(A)、本書と市岡氏蔵本が陽明本本文に一致する場合を(B)として、例を掲げる。

	(A)	(本書)	(市・天甲・茶甲・京・筑)	(陽明本)
15(13)	詞書	伊勢に(の歟)	伊勢の	伊勢に
52(49)	初句	山里へ	山里に	山さとへ
120(118)	第三句	ちりぬ(ね歟)花	ちりね花	ちりぬ花

157(155)第三句　木こそさく　木にそさく　木こそさく
1262(1244)初　句　われなしや　わりなしや　われなしや
1567(1550)第五句　たゝよしや　たゝよふや　・よしや

なそ　なそ　なそ

(B)　(本書・市)　(天甲・茶甲・京・筑)　(陽明本)

86(83)初　句　かさこしの　かきこしの　かさこしの
222(217)第三句　みをしるし　みおつくし　みをしるし
1359(1341)第五句　我か心や　わか心なり　われか心や
1439(1421)初　句　あしよしを　よしあしを　あしよしを

すなわち、第二類本Cの中では、比較的陽明文庫本に近い本文を有する一本といえるであろう。

本書は、前述した如く、陽明本に欠く歌を、多量に本行に有するが、それらは版本と同一の本文ではない。版本と本文の異なるものの例を掲げる。(括弧内は版本)

211(206の次)第三句　心かけて(玉かけて)
317(311の次)第四句　雲の波たえ(雲の波さへ)
537(525の次)第五句　夜半の初雪(よはの白雪)
1168(1151の次)詞　書　月をいたゝきて道を行といへる事を(松の木のまよりわつかに月のかけろひけるをみて月をいたゝきて道を行といふことを)

右のうち、317・537には歌の末尾に「イ」の注記がある。537は詞書に「夜初雪」とあって、版本より本書の本文の方が良いのであるが、版本系では三手文庫本のみ「よはの初雪」の本文となっている。

さらに、第二類本のみに欠く328(322)〜343(337)、822(807)〜830(815)の部分の本文をみると、この部分には「イ」の注記がないので、いちおう第二類本系本来の形態かと推測されもするが、この部分の本文には、陽明本・版本いずれにも一致しない独自異文及び版本に一致するものが多い。

328(322)第二句　月に残れる(版・陽「月にかゝれる」)、329(323)第二句　氷をしける(版・陽「氷そしたる」)、331(325)第一・二句　なへてなき所の名をや(版・本書に同じ、陽「なへてなを心のなをや」)、334(382)第五句　明ぬなる哉(版「明にけるかな」、陽・本書に同じ)、341(335)初句　おもひせぬ(版・本書に同じ)、陽「をいもせぬ」)、823(808)初句　いかてとも(版・本書に同じ)、陽「いかにとも」)、824(809)第四句　さらに別や(版「さらになけきは」、陽「さらになけきや」)、823(808)第三句　名残あるを(版・本書に同じ)、陽「のこりけるを」)

本書は全体としてみると、本文は陽明本のそれにかなり近く、独自異文も比較的少ないので、この部分も、他の書入れ歌と同様、やはり他本からの書入れであろうと思われる。この書入れは、本書で生じたともみられるが、むしろ、依拠本ですでに行われたものだったのではなかろうか。

イ本の書入れの状況も複雑である。本書の書入れには、合点を付したものが、しばしばみられる。イ本を検討してみると、それぞれ版本系のもの、松屋本系のもの、山家心中集本文に一致するもの、他に所見なき独自のものが混在し、特定することは困難である。

次にイ本の本文が、他に所見なきものの例を掲げる。

88(85)第四句　花をへたつる（尋ぬるイ）　249(244)第三句　したふ哉（こふるイ）　255(250)第四句　秋さきたつる（をあらそふイ）　559(546)第四句　つほめる花の（ふゝイ）

617(602)第四句　うらやむ袖の（みぬイ）　646(632)第四・五句　にこらてすめる水ならねとも（こほれかゝりてかこつ涙かイ）　822(807)初句　いるさには（まてにイ）　1203(1186)第五句　花は咲めり（さきけイ）

ところで本書には、1386(1369)の次に注目すべき書入れがある。

むかしみし月の光を（イニ）—此哥迄在上下有二冊瞻西上人ノ哥新古今巻軸也不審／爰マテ以別本校合了此末ハ無別本

1388(1370)の前には、松屋本以外の『山家集』諸本に「又ある本に」という注記がある。これによって、1387(1368)までが山家集の原型であり、「又ある本に」以下が増補部分であることは容易に推察されるが、実際に1387(1368)までの本が存在して、その本によって校合がなされたのである。すると、「又ある本に」以下の部分をもたない原山家集の面影を伝えるものとして、本書のイ本注記は誠に貴重であるといわなければならない。

ただ、1388歌以下にも二箇所のイ本注記があり（このイ本本文は版本に一致する）、又、奥書部分に貼付された一本奥書等をみても、本書が複数のイ本によって校合されていることは確実である。中には、「集歟」「集也」などと注記して、勅撰集本文と対校している部分もある。又、342(336)詞書「くもる十五夜を」とある下に、やゝ小さく「童子神之心」とある。諸本「くもれる十五夜を」とのみあって、この注記はない。これは『山家心中集』宮本家本及び内閣文庫本にみられる注記にほぼ一致する。（宮本家本では「童子神心ヲ」とある。また、内閣本では一首前の「おひもせぬ」の歌の下に付されている。）

949(935)以下は、「題しらす」として一括される歌群であるが、中巻末「題しらす」の下に、「無題歌百八首イ」とある。版本は一〇九首、陽明本は一〇七首、松屋本は一〇三首の歌数を有するが、このイ本は百八首の歌を有するものだったのであろう。

ともあれ1386歌までの本をも校合に用いていることは、原山家集の面影を探る一つのよすがとして注目されるのである。

市岡勝太郎氏蔵〔江戸初期〕写　三冊

縹色地に金泥にて松・雲・水辺草花等を描ける表紙、二五×十七・九糎。綴葉装。料紙、鳥の子。毎半葉十行。字面高さ約二十一糎。墨付上冊四十六丁、中冊四十丁、下冊四十七丁。題簽、表紙左肩に貼付、「山家集上（中、下）」。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。

まず、歌の異同に関して、陽明本と比較すると、175(173)、328(322)〜343(337)、822(807)〜830(815)、1505(1487)の各歌を欠くことは、第二類本に共通であり、79(70)、764(749)の二首を欠くことも、第二類本Cにみられた特徴である。さらに本書は、286(281)の次に289(284)を重出している。恐らく不用意によるものであろう。又1183(1166)を欠くが、本書独自のものである。以上によって、本書の歌数は一五二三首、うち重出歌を一首含んでいる。

歌の排列についても、460(453)・459(451)・458(452)の歌順が第二・三類本に共通してみられるものであるが、さらに、次の三箇所に本書独自の排列がみられる。㈠564(550)・565(552)・566(553)・563(551)、㈡1047(1031)・1048(1032)・1049(1033)・1046(1030)、㈢1213(1196)→1219(1202)の次。

書写形態について付言すると、本書と次述する天甲本は、九丁オまでほぼ行格を等しくするほか、全体的に見ても、一・二行前後するだけで、きわめて近似した形態を有している。本文が近似することと併せ、注意されるのである。

本文は、時に日本女子大本に一致し、時に天甲・茶甲・京・筑の各本に一致するが、どちらかと言えば日本女子大本に近い本文を有している。

天理図書館蔵〔江戸前期〕写　一冊　甲本

〔同　九一一・二・イ一六三・六（A八一八）〕

茶色無地表紙、二十五・四×一八・八糎。毎半葉十行。字面高さ約二十糎。墨付百三十三丁。外題、表紙中央上部に「山家集」と墨書、その右側に貼紙して「西行上人」と記す。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。

本書は前述した第二類Cに欠く歌を本書もすべて欠き、1557(1540)は上二句のみが記載されている。この現象は本書と次述するお茶の水図書館蔵甲本、京大図書館蔵本のみにみられるものである。

又、328(322)〜343(337)、822(807)〜830(815)という各一丁分の纒った歌群を欠くことも、第二類本を通してみられる特徴である。本書はちょうど328(322)より改丁箇所に当っており、落丁祖本に近きを思わせるものがある。822〜830の落丁箇所については、各本とも、落丁箇所直前の、822(807)詞書の前半「とかくのわさはてゝあとの事ともひろひて」と831(876)詞書「返し」が繋がってしまっている。

さて、以上により本書の歌数は、陽明本より二九首少ない、一五二三首である。

歌の排列も、第二類本Cに共通にみられる排列を示している。

本文は、しばしば他の第二類本Cと共通異文を見出すが、中でも本書・茶甲・京の三本がより近似する本文を有している。

お茶の水図書館蔵〔江戸中期〕写　三冊　甲本

紺地金泥山水模様表紙、二十三・五×十六・七糎。見返し、金泥・緑・赤紫色等にて草花を描く。綴葉装。料紙、鳥の子。字面高さ約十八・五糎。毎半葉十行。墨付上冊三十一丁、中冊三

十九丁、下冊四十七丁。題簽、表紙左肩に金箔散し白紙短冊を貼付「山家集上（中、下）」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。印記「徳富文庫」「蘇峰清賞」「須愛護蘇峰嘱」「徳富猪一郎」「東京林縫之助蔵書」（以上すべて朱印）。

本書上冊には誤綴が存する。すなわち、上冊は二折より成るが、『山家集』は第一折まで〔204(200)詞書途中まで〕で、第二折には、『壬二集』上之下百首和歌郭公「時鳥いつくにいまは山かつのきゝもとかめぬはつねなくらん」以下が誤綴されているのである。

歌の異同、排列等に関しては、天甲本と同一であるが、上冊204(200)～591(597)部分を欠くため、歌数は一一六一首である。

本文も、前述の如く天甲本とほぼ同一である。

京都大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写　一冊

（六家集十冊のうち）縹色地縦縞文様裂表紙、二十三・八×十八・一糎。見返し、水色・白・緑等にて水辺菖蒲蓮花等を描出。綴葉装。料紙、厚手鳥の子。毎半葉十行。字面高さ約十八・八糎。墨付百四十丁。題簽、表紙左肩に金箔散らし白紙短冊貼付「山家集」と墨書。その右に、子持枠付白紙短冊を貼付し「六家集　第一冊終」とする。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。

本書は天甲本・茶甲本などと同一系統に属するが、本書にはさらに三カ所に脱落がみられる。それは、485(476)、498(488)、1213(1196)の各歌である。このうち485・498の二首は筑波大本と共通し、1213は本書のみにみられる脱落である。従って歌数は、天甲本より三首少ない、一五二〇首となる。

歌の排列についても、本書独自のものがみられる。㈠78(76)が84(81)の次にある。㈡410(404)・409(403)、㈢1274(1256)・1275(1257)・1273(1255)、㈣1499(1481)・1500(1482)・1498(1480)。

右の四箇所の異同は、如何なる理由によるものか不明である。

本文は天甲・茶甲本とおおむね共通するが、中には筑波大本と本書のみにみられる共通異文もある。

18(16)初句　子日して（他本「子日しに」）　75(73)第五句　木はなかりけり（他本「木そなかりける」）　534(523)第三句　おはらかし（版本「をきとゝし」陽明本「すはへかし」学習院大本「おはえかし」等区々。）　1021(1006)第五句　ゆきしふくめり（陽明本「雪しまくめり」版本「雪しまく也」）

又、イ本書入れが僅かになされている。

筑波大学図書館蔵〔江戸前期〕写　一冊

（六家集九冊のうち）紺色無地表紙、二十三・一×一七糎。綴葉装。料紙、鳥の子。字面高さ約十八・七糎。毎半葉十行。墨付百四十一丁。題簽、表紙左肩に波雲形文様短冊貼付「山家集」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)。

本書は、本来三冊本であったものを一冊に合冊したものである。本書には大量の脱落があり、四カ所五丁分にわたって別筆補写部分が存する。この補写部分のみ毎半葉十一行乃至十二行に書写している。補写部分を歌番号で示せば321(315)～352(346)の

二丁分、三二首、822(807)〜830(815)の一丁分、九首、1112(1096)〜1120(1103)までの一丁分、八首、1167(1151)〜1175(1158)作者までの一丁分、八首、計五丁分、五七首である。この補写部分の本文は版本のそれに一致する。

歌の異同については、天甲・茶甲・京各本と共通である。

又、本書は陽明本系に欠く歌の大多数を、右の補写部分と同筆にて書入れている。この部分の本文も、版本と同一である。右の補写部分以外の書入れ補入歌を歌番号のみで示せば次の通りである。

5(41の次)、79(70)、175(173)、179(176の次)、196(192の次)、211(206の次)、220(215の次)、317(311の次)、420(413の次)、462(454の次)、467(458の次)、485(476)、491(481の次)、498(488)、502(491の次)、537(525の次)、541(528の次)、596(581の次)、686(612)、764(749)、805(790の次)、989(974の次)、1023(1007の次)、1235(1217の次)

右の歌のうち、175(173)を欠くことは、二類本に共通してみられたが、79(70)及び764(749)を欠くことは、二類本Cにのみみられる現象であった。この79は、他の陽明本系諸本は72(69)の次に位置しているのであるが、本書では78(76)の次に書入れている。これは版本系一本によって書入れがなされたためである。686(612)は、陽明本系諸本、皆626(611)の次に存するのであるが、本書ではさらに685(671)の次に補写されている。これも同じ理由による。又485(476)と498(488)を欠くことは、本書と京大附属図書館本のみにみられる現象である。

陽明本系に共通に欠く11(9の次)、37(34の次)、589(575の次)、及び第二類本のみに欠く歌1505(1487)については、補写がなされていない。見落しによるものであろうと推定される。

さて、以上によって本書の所収歌は一四九一首、686(612)の重出分を含め、書入れ歌は八十一首である。

排列については、おおむね他の第二類本Cと共通するが、次の二カ所に本書独自の排列がみられる。すなわち、㈠117(115)↓123(121)の次、㈡1221(1205)・1223(1206)・1221(1204)の順となっている。

本文については、天甲・茶甲・京の各本と近似し、従ってこの四本についての共通異文がしばしば現われるが、中でも京本と殊に親近する関係にあることは、前述のとおりである。

ところが、かかる本文の中に版本の本文がかなり混入してくることが、本書の大きな特徴である。

第二類本C全体に、陽明本の本文とは異なり、版本と同一の本文のみられる場合があるが、それとは別に、本書のみ単独に版本と同一の本文を示すことがしばしばあるのである。これはよく見ると、本書の本文を版本と対校し、恐らく版本本文に拠るべきものと筆写者により判断された箇所についてであろう、該当部分が削り取られ、版本によって書き入れが施されているのである。従って、全体として双方の本文を折衷した形の、一種の校訂本文となっているが、本書の本来の形は、あくまで第二類本Cの本文と言うべく、就中京大図書館本と最も近似する関係を示しているのである。

次に、本書で改訂を加えられたと思われる本文の例を掲げる。

24(22)初句　うつえつき（版「卯杖つき」、陽・市「うつしつき」・他の二類本「うへしつき」）、31(29)第四句　谷のほかへは（版「谷の外へは」、陽及び他の二類本「たにのをかへは」）、45(42)第五句　かやうつすらん（版「かやうつすらん」、陽及び他の二類本「かやにほふらん」）、571(558)第五句　冬の夜の月（版「冬の夜の月」、陽及び他の二類本「冬のやまさと」）、648(634)第三句　身をなして（版「身をなして」、陽及び他の二類本「そてなれて」）、720(705)第二句　なととふ人の（版「なととふ人の」・陽及び他の二類本「とふ人のなと」）、1077(1061)第四句　むへつみけらし（版「むへつみけらし」・陽及び他の二類本「むへつみはへし」）、1500(1482)初句　月のよや（版「月のよや」、陽・関甲「月のよやかて」・他の二類本「月よやかて」）

すなわち、もともと他の二類本と同一であったと思われる本文が、版本によって改訂されているのである。

イ本書入れも僅かになされているが、ここで用いられているイ本もやはり版本である。

かかる次第で、本書はまず第二類本Cの本文が書写され、その本文の一部が版本によって改訂を施された。次いで脱落五丁分及び脱落歌が版本によって補入され、さらに版本によってイ本校合がなされて、全体として版本の本文の大量の流入をみるに至ったものである。

その象徴的ともいえる一例を挙げれば、巻末近くに次のような歌がある。

1557ちかひありてねかはん国へ行へくは
　にしのことはにふさねたる哉（1540）

右の下二句は、陽明本では「にしのかとよりさとりひらかん」となっている。右の筑波大本の本文は版本の本文と同一であるが、版本は、次の1558(1541)の下二句を目移りによって誤刻しているのである。これは、天甲・茶甲・京の各本と同様、上二句しか書写されていなかったところへ、版本によって補写がなされたため、かかる間違いを生じたものであろう。

第三類本

A　天理図書館蔵〔江戸前期〕写　三冊　乙本
〔函架番号　九一一・二三・イ一一（A八六〇）〕

表紙縹色地、天地に金箔を散らす。二十六・四×十八・三糎。字面高さ約二十二・五糎。毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、中冊三十八丁、下冊四十七丁。表紙左肩に題簽「山家集上（中、下）」と墨書。内題「山家集上（中、下）」、奥書(A)(B)(C)。印記「温故堂文庫」（朱）、「和学講談所」（朱）。

本書は次述する神宮文庫本ときわめて近似する一本である。

まず歌の異同をみると、本書は陽明本系に欠く版本独自歌のうち、5（4の次）・11（9の次）・37（34の次）・179（176の次）・196（192の次）・211（206の次）・220（215の次）・317（311の次）・420（413の次）・462（454の次）・467（458の次）・491（481の次）・502（491の次）・537（525の次）・541（528の次）・589（575の次）・596（581の次）・805（790の次）・989（974の次）・1023（1007の次）の二十首を行間に書入れている。右の

うち、5、11、179、317を除く十六首には、「付帋」等の注記が付されている。版本独自歌の残りの1113(1096の次)、1168(1151の次)、1235(1217の次)の各歌については、本来の位置を注記したうえ、巻末に一括補入している。但し、右書入れ歌のうち317(311の次)については、319(313の次)の次に書入れている。

又、77(75)、208(203)の二首を欠いて、これを書入れ補入している。この二首を欠くのは、本書と神宮本である。補入歌は、版本系写本によっているため、686(612)は、626(611)の次に本行に存するほか、685(671)の版本と同じ位置にも書入れられて、重出する結果となっている。

又179(176の次)は、同位置に書落されたものが177(175)の次に書入れられ、さらに178(176)の次すなわち、版本と同じ位置にも、「付帋」と注記して重出補写されている。

以上によって、本書の所収歌は、一五五〇首、重出する686、179を含め、書入れ歌は二七首である。

歌の排列については、陽明本と比較するに、㈠223(218)・222(217)、㈡460(453)・459(451)・458(452)、㈢578(565)・576(563)・577(564)、㈣1303(1285)・1302(1284)の排列が異なっている。このうち、㈠、㈢は、本書と神宮文庫本のみにみられるものであり、㈢は第二・三類本に共通にあらわれた歌順であった。㈣は、本書独自の排列である。㈡・㈣には、順序を正す注記がある。

本書は、いわゆる玄旨校本と呼ばれている一本である。すなわち(A)(B)の奥書のあとに、「此山家集密々申出／禁裏御本遂書写校合早尤／可為證本乎／干時文禄三年季春上澣／玄旨判」と記されている。

これによれば、玄旨（細川幽斎）は、禁裏御本を書写校合しているのである。本書は、その転写本である。

第三類本の現存諸本には、版本独自歌の多くが、余白、あるいは本行に書入れられているが、本書の本文を見るに、第一類本の本文の中に、ところどころ版本の本文に一致するものを見出すことが一つの特徴である。それは多く、陽明本系本文の明らかな誤りが版本系本文によって正されているかの如き観を呈している。第三類本は、そのような意味で、一種の校訂本文とも言うべく、全体として、かなり良質な本文となっている。ただ、かゝる校訂が、いかなる段階で行なわれたか、未だ審らかにしない。

第二類本Cにも、版本系本文の流入がみられたが、第三類本との間に直接の書承関係は認められない。

次に、本書に特徴的にみられる本文の例を掲げる。（校合注は省略）

43(40)第二句　よる〳〵むめの（版本「よる〳〵梅の」、陽「とく〳〵むめの」、筑及び第三類本は版本に同じ、その他は陽に同じ）、45(42)第五句　かやうつすらん（版「かやうつすらん」、陽「かやにほふらん」、筑・第三類本・多は版本に同じ、他は陽に同じ）、85(82)第二句　心をさへに（版「心をさへに」、陽「こゝろをさらに」、第三類本は版に同じ、他は、陽に同じ）、161(159)第五句　すみれつみけん（版「菫つみけん」、陽「すみれつみてん」、市及び第三類本は版に同

じ、その他は陽に同じ)、402(396)第五句　月そやとれる(版「月そやとれる」、陽「月そすみける」、第三類本・筑は版に同じ、他は陽に同じ)、698(683)第五句　我涙かな(版「我なみたかな」、陽「わかおもひ哉」筑及び第三類本は版に同じ、他は陽に同じ)、943(929)初句　このもとに(版「木のもとに」、陽「もろともに」、天乙・神宮・書丙・多は版に同じ、他は陽に同じ)、1077(1061)第五句　ゑくのわかたち(版「ゑくのわか立」、陽「しはのわかたち」、第一類本C、第三・四類本は版に同じ、他は陽に同じ)

右に多くみられるパターンは、他の多くの伝本が陽明本系の本文に一致するときに、第三類本が、版本と同一の本文を示すことである。又、例示しなかったが、本書と次述する神宮文庫本のみが、かかるパターンを示すことがある。(筑波大本がしばしば版本と同一であるのは、前述した如く、本文を部分的に削り取って、版本の本文を書入れているからである。)

さらに、本書と神宮文庫本のみにまま共通異文がみられることも注意される。

19(17)第三句　あひたれは(他本「あひぬれは」)72(69)第五句　まかふ心を(神宮「まかふ心を」、他本「かよふ心を」)329(323)第五句　かつまたの池(神宮「かつまたの池」他本「秋のよの月」)334(328)第五句　あけぬ也けり(神宮「あけぬ也けり」、版・筑「明にけるかな」、他本「あけぬ成る哉」)

概してかかる共通異文には、誤写に基づくものが多いように思われる。

次に、本書に於ける書入れ補入歌をみると、本来陽明本系には欠く歌であるから、版本からの書入れと考えられるが、その本文は版本のそれとはやや異っている。

37(34の次)初句　香こそまつ(版「香にそまつ」)420(413の次)第二句　友にあふへき(版「君にあふへき」)491(481の次)第五句　そてにたくへる(版「袖にまかへる」)537(525の次)第五句　よ半の初雪(版「よはの白雪」)805(970の次)初句　なきかけを(版「なきあとを」)

537が三手本に一致する以外、かかる本文を有するものは、現存伝本の中には見出されない。書入れの行われた当時にはかかる本文を有する版本系の伝本が存したのであろう。

次に、イ本書入れであるが、本書には少くとも三種の書入れが存する。

その一は、原写本に既に存したと思われるもので、次述する神宮文庫本と共通するものである。その二は、上巻にみられる朱にて書入れのなされたものである。これには「一」と注記のなされたものと、注記のないものとがある。その書入れは、第二類本系の本文—市岡氏本にごく近い一本によって行なわれている。

48(45)第三句　つれくに(筑を除く第二類本C「つれくと」、他本「つれくに」)100(97)第四句　身ならすは(第二

類本A及び筑を除くC「身ならては」、他本「身ならすは」）293(288)第四句　荻のをとこす(こそ(朱))（版・筑・多「荻の音する」・市「荻の音こそ」、他本「をきのをとこす」）397(391)初句　よひのまの(も(朱))（市「よひのまも」、他本「よひのまの」同第五句　影にたはるゝ(その(朱))（市「影そたはるゝ」、他本「影にたはるゝ」）

その三は墨筆の書入れである。この書入れは版本によっており、全巻にわたり多数存する。朱の場合と同様「一」と注記するものとしないものとがある。

本書は、以上にみた如く、本文自体に版本系本文と同一の本文がみられ、さらにイ本校合によって、版本及び第二類本系本文が書き加えられ、全体として、『山家集』の本文を総覧するかの如き趣を持つものとなっている。

神宮文庫蔵〔江戸前期〕写　三冊

（六家集十八冊のうち）縹色無地表紙、二十七・七×十九・二糎。字面高さ約二十四糎。毎半葉十一行。墨付上冊四十四丁、中冊三十八丁、下冊四十七丁。題簽、銀泥唐草模様白紙短冊「山家集上（中、下）」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。印記「林崎文庫」（朱）。

六家集各冊裏表紙見返しに「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巌敬義拝」の朱印を捺す。

本書は、陽明本に欠く版本独自歌二十三首をすべて欠くが、そのうち、5(4の次)・11(9の次)・37(34の次)・179(176の次)・196(192の次)・211(206の次)・220(215の次)・420(413の次)・462(454の次)・467(458の次)・491(481の次)・502(491の次)・537(525の次)・541(528の次)・589(575の次)・596(581の次)・805(790の次)・989(974の次)・1023(1007の次)の十九首を書入れ補入している。317(311の次)・1113(1096の次)・1168(1151の次)・1235(1217の次)の四首は補入されていない。

さらに、本書は77(75)・170(168)・208(203)の各歌、計三首を欠いている。このうち170、208の二首を補入している。77、208は本書と天乙本のみに欠く歌である。

右の二十一首の補入歌のうち、5、11、37、170、208を除く十六首に「付帋」「付カミ」等の注記が付されている。208は詞書のみ存し、208(203)歌及び206(204)詞書を欠いているが、同部分が細字で補入されている。さらに本書には、陽明本に欠く版本独自歌179(176の次)が本行に存する。この歌が版本どおりの排列ではなく、177(175)の次に書写されている点より推すと、依拠本乃至祖本で補入されたものが、転写の過程で本行化されたのではなかろうか。

以上によって、本書の歌数は一五五〇首、書入れ歌が二一首である。

歌の排列については、すべて前述の天理図書館蔵乙本に一致する。

本文に関しては、天理乙本とほぼ同一であるが、僅かに異なる詞句が存する。両本の間に書承関係は認め難い。両本を対照してみる。（括弧内は天乙本）

115(113)第五句　しかの山こへ（しかの山道）、644(630)第三句　かけはかり（月影の）、811(796)第三句　なしはてゝ（わけなして）、1070(1054)第五句　沖つ白浪（奥つしほ風）、1367(1349)第四句　うかりし人そ（うるはし人そ）、第五句　いまはうれしき（今はうれしき）

本書には、イ本書入れ、無注記の書入れ、見消ち等が存する。本文は上冊278(273)までとそれ以下との両筆によって書写されているが、書入れはそれぞれ本文と同筆である。下冊の初めの方のイ本書入れは朱でなされている。このイ本書入れは、前述した如く、天乙本と共通するところから、依拠本に既に存したものと思われる。本文が版本系のものである場合は、イ本は陽明本系の本文であり、本文が陽明本系のものである場合には、版本系の本文が書入れられている。

これとは別に、見消ち、無注記の書入れがかなり多量に存する。これは本書が天乙本と同一の一本によって対校されているのである。独自の書入れもあるが僅少である。

奥書には、他本との間に少異がみられる。他本にある「本云一千五百七十二首云々」の「云々」、「志可校証本」の「志」、「可為証本乎」の「為」をそれぞれ欠くが、本書は全体に誤写が多く、書落としたものであろうと推定される。又、諸本「文禄三年季春上澣」とあるところ本書は「――下澣」と作り、諸本「玄旨」とあるところを本書は「玄旨判」としている。（書丙本も「玄旨在判」とする。）

B　書陵部蔵〔江戸前期〕写　三冊　丙本

〔函架番号　五一一・一〕（桂宮本）

茶褐色無地表紙、二十六・六×二十・五糎。字面高さ約二十三糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十一丁、中冊三十五丁、下冊四十二丁。題簽、表紙左肩に白紙短冊を貼付「山家集上（中、下）」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書(A)(B)(C)。

目録によると智仁親王写と伝えるが、三冊それぞれ別筆である。

さて、本書は陽明本に欠く版本独自歌のうち、5(4の次)、11(9の次)、37(34の次)、179(176の次)、196(192の次)、211(206の次)、220(215の次)、317(311の次)、420(413の次)、462(454の次)、467(458の次)、491(481の次)、502(491の次)、537(525の次)、541(528の次)、589(575の次)、596(581の次)、805(790の次)、989(974の次)、1023(1007の次)の二十首が本行に存する。この二十首は、天乙本で、余白に書入れされていた歌に一致する。残り三首のうち、1113(1096の次)、1235(1217の次)の二首は貼紙して補入している、1168(1151の次)のみ、欠いたまま補入されていない。その他341(335)、897(882)、1549(1532)の各歌を欠いているが、うち897、1549歌の二首を書入れている。以上によって、歌数は陽明本より十七首多い一五六九首、書入れ歌四首である。

歌の排列も、陽明本と比較した場合、460(453)・459(451)・458(452)の排列が第二・三類本と共通するほかは、陽明本と同じである。

本文は茶乙本に近似し、陽明本本文の中に版本系本文の混入

した形態を示す。独自異文は比較的僅少である。第三類本の本文が共通に版本の本文に一致することもあれば、第三類本Aが陽明本系本文に一致するときに同Bが版本系本文に一致する場合、あるいはその逆の場合、さまざまである。

	書丙(茶乙)	天乙(神)	版本	陽明本
85(82)	第四句	春はまちし	春をまちし	春はまちし
		か	か	か
86(83)	第五句	なくやちり	なくや散な	なくやちる
		なん	ん	らん
				なくやちり
				なん
1021(1006)	第五句	ゆきしまく	ゆきしまく	雪しまく也
		なり		り
				雪しまくめ
				め
1077(1061)	第四句	つみはへし	つみけらし	つみけらし
1262(1244)	初句	わりなしや	わりなしや	われなしや

本行化している書入れ補入歌が版本系本文であることは言うまでもないが、版本による直接の書入れではないことは、次の如き例によっても知られる。(傍記は版本)

537月いつる折にもあらぬ山のはの
　しらむにしるし夜はのはつ雪

祖本に於て書入れられたものが、転写の過程で本行化したものであろう。

本書独自の脱落歌を補入した897(882)は、陽明本系の本文である。

イ本校合もなされていて、各冊巻末書脳に「一校了」(上、中冊)、「続校了」(下冊)と記している。本書に用いられたイ本は、版本である。

お茶の水図書館蔵〔江戸後期〕写　三冊　乙本

茶褐色無地元表紙。薄茶色刷毛引模様改装表紙、二十七・四×二十・六糎。字面高さ約二十二糎。毎半葉十二行。墨付上冊四十丁、中冊三十四丁、下冊四十一丁。外題、元表紙上中冊左側に「山家集」と朱書、下冊にはなし。上冊、表紙右側に「後水尾天皇ゝ子／盛胤法親王手沢」と墨書。その下に「共参／主蘇峯生」と朱書。改装表紙上冊右側に「共三冊／梶井宮盛胤法親王手沢／珍書　大正戊午五月　三／蘇峯学人」、左肩に「山家集　一（二、三）」とそれぞれ墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書なし。印記「徳富氏珍蔵記」（朱）「加持井御文庫」（朱）「盛胤之印」（方朱）「円融蔵」（朱）。

まず歌の異同をみると、陽明本系に欠く版本独自歌二十三首のうち、5(4の次)・11(9の次)・37(34の次)・179(176の次)・196(192の次)・211(206の次)・220(215の次)・317(311の次)・420(413の次)・462(454の次)・467(458の次)・491(481の次)・502(491の次)・537(525の次)・541(528の次)・589(575の次)・596(581の次)・1113(1096の次)・1168(1151の次)・1235(1217の次)の二十首を本行に有する。版本独自歌のうち、805(790の次)・989(974の次)・1023(1007の次)の三首は欠いている。又、陽明本独自歌113の次(111)が本書にはみられない。818(803)歌が819(804)詞書のあとに重出する。不用意の重出であろう。

さらに、本書のみに欠く歌は、229(274)・438(431)・654(640)・709

(693)・774(759)・990(975)・1003(988)・1045(1029)の各歌であり、341(335)は書丙本と本書が欠いている。以上によって本書の歌数は、一五六三首であり、重出歌を一首含む。

排列に関しても、やや特異な形態を示すものが多く、陽明本と比較すると、㈠77(75)・76(74)、㈡460(453)・459(451)・458(452)、㈢466(458)・465(457)、㈣1114(1097)・1115(1098)・1113(1096の次)、㈤1298(1280)・1299(1281)・1300(1282)・1297(1279)、㈥1314(1296)・1313(1295)、㈦1347(1329)・1346(1328)、㈧1558(1541)は1563(1546)の次、の各歌が排列を異にしている。右のうち、㈡は、第二・三類本に共通にみられるものであったが、他は本書独自のものであり、欠落歌の多いことと併せ、本書の書写態度にやや杜撰なものが感じられるのである。

本文は前項に記した如く、書丙本に近似する。但し、書丙本が版本の本文に一致するときに、本書が陽明本本文に一致したり、あるいは、その逆であるケースも散見する。独自異文は少ない。本書も、版本系独自歌が大量に本行に存するが、祖本において書き入れられたものが、転写の過程で本行化されたものと考えられる。

イ本書入れも僅かに存するが、書丙本に一致するところをみると、依拠本にすでに存したものであろう。

第四類本

多和文庫蔵〔江戸後期〕写　一冊

薄茶色無地表紙、二十七×十九糎。字面高さ約二十一・五糎。毎半葉十二行。墨付百三十一丁。但し、末十一丁は、本書に見えざる異本所収歌を収録している。題簽、表紙左肩に金箔散らし白地裂短冊を貼付「山家集」と墨書。内題「山家集上（中、下）」。奥書は校本所載のものを掲ぐ、(A)(B)。印記「香木舎文庫」（朱）、「集古清玩」（方、緑印）。

本書は、陽明文庫本と版本を折衷したかの如き観を呈する、特異な形態を有する一本である。陽明本に欠く版本独自歌二十三首をすべて本行に有する。そして、それらのうち179(176の次)、805(790の次)の二首を除く二十一首には「無校本」などの注記を付している。無注記の二首は書落したものであろう。

620(605)は、版本では491(481の次)に重出し、686(612)と1387(1367)は、陽明本と版本では排列を異にしている。これらの三首については、本書では、陽明本本来の位置に存するほか、版本の排列に従って本行に重出している。以上によって、本書の歌数は一五七六首であり、三首重出している。

次に歌の排列に関して、陽明本と比較すると、㈠460(453)・459(451)・458(452)、㈡708(694)・709(693)、㈢722(708)・723(707)、㈣1314(1296)→1299(1281)の次、㈤1350(1332)・1349(1331)の各歌が陽明本の歌順と異なっている。右の㈠の排列は、第二・三類本に共通するものであり、㈡及び㈢は版本と同一である。又㈣及び㈤は本書独自の排列である。

本書は全体として、如何なる経過を辿ったかわからぬが、陽明本と版本を混淆して一種の校訂本文を作成していったかの如き趣きを有する一本である。㈡及び㈢の排列に該当する周辺には、殊に版本の本文が多量に流入している。

独自異文は少数にとどまる。次に、本書の本文の例を掲げ、その本文が陽明本に一致するときは版本本文を、版本に一致するときは陽明本本文をそれぞれ傍記して、対照してみることにする。

24 卯杖(うつし(陽))つき七草にこそおひ(出(版))にけれ
年をかさねてつめる若なに(22)

120 もろともに我をもくしてちりね(ぬ(陽))花
うき世をいとふ心ある身そ(に(陽))(118)

189 ほとゝきすきかて(な(版))明ぬとつけかほに
またれぬ鳥のねそきこゆなる(とも(陽))(186)

341 おひもせ(もひ(版))ぬ十五のとしもある物を
こよひの月のかゝらましかは(335)

349 虫の音もかれ(に(陽))行のへの草むらに(の原(版))
哀をそへてすめる月かけ(343)

466 虫のねにつゆけかるへき袂かは(さのみぬ(版))
あやしや心物おもふよし(へ(陽))(458)

606 さらはたゝさらてそ人のやみなまし
さて後も又さもあらしとや(さはイ やあらしと(版))(591)

(陽明本・第四句「さてのちもさは」)

906 (詞書) 神力品於我滅度後(なし(陽))の文を(892)

1296 忘られんことをはかね(かさ(版))ておもひにき
なとおとろかす涙なるらん(何(陽))(1278)

右にみられる如く、一首のうちに陽明本系本文と版本系本文が共存するものもある。中には、粗悪本文の方を採用したのではないかと思われる例もあるが、全体的にみると、両者の優良本文を併せ、校訂本文を作成した観を呈している。

版本独自歌二十三首の書入れは、版本から直接行なわれているようで、用字に至るまで殆んど一致している。

本書にはイ本書入れがある。校本は第一類本B、すなわち、書陵部蔵乙本にきわめて近い本文を有する一本である。版本系の本文を採用した箇所に、校合がなされている。但し、全体にまんべんなく行われているわけではなく、下冊に殊に丁寧に行なわれている。

奥書は書陵部蔵乙本と同一のものが、「校本云」として掲げられている。奥書の中にある「見隆信朝臣集也」の「見」の字が、書乙本と本書にのみみられるものであることも、本書に用いられた校本が書乙本にきわめて近似する一本であることを証している。

本書は、形態的には、陽明本系の特徴を備えているが、行格は、むしろ版本に近似している。

三、松屋本系諸本

平井卓郎氏蔵版本書入れ本

本書は、版本に書入れされた元の本が、他に所見なき歌を多量に有し、陽明本系、版本系とはかなり性格を異にする別系の一本として、注目されるものである。本書については、平井卓郎氏及び高城功夫氏が詳しく紹介・考察をされている（前掲）。

本書の成立に関しては、『壬二集』上巻巻頭に記されている書入れによって、その大凡を知ることができる。

師翁高田与清蔵本に。玉吟集の古写本あり。又山家集の古写本も有て。共に同一筆の本にして。筆者の姓名を記さねど。其書の最（イト）うるはしき事。云むかたなし。玉吟集のかたは。写得たりし年月などもなければ。いつばかりの写とも詳（サダカ）には知りかたかれど。此書と一筆（ヒートツテ）なる。山家集のかたには。延宝三のとしきさらきの比うつし侍る也。とたしかに奥書もあれば。此玉吟集も。共に延宝三年の写本なることは論なし。（中略）一、師翁の本は。今。松本といひ。（中略）是（コヽ）ことしげきを略（ヘブカ）む為のわたくし心にして此書入に限りたる仮そめことゝしるべし。（後略）

文政十年ひのとの亥のとしみな月のころ山家集とともにかり得て校合なしをへぬ

たか辺のやのあるし源の都止布

そして、『山家集』上巻巻末には、

写本の奥に

延宝三のとしきさらきの比うつし侍る也

と記されている。すなわち、延宝三年二月頃書写した旨を記した奥書のある古写本を、高田与清が所持していたが、その門弟である「たか辺のやのあるし源の都止布」が文政十年六月頃この古写本を借用し、『山家集』版本に書入れ校合を加えたもの、それが本書である。原本は伝わらないが、版本への青墨の書入れによって、原本の姿をある程度窺うことができる。与清（号・松屋）旧蔵本ということで、松屋本と通称されているのである。

本書には注目すべき奥書がある。

本書云

山家集哥三千百十二首也其中より三重集をはえらひいてられたるなり但百首をのそかれたり此山家集本歌の次第もしとけなくみたれ侍り哥のかすもいま三十一首たらす正本はなら伊勢にそ侍なるたつねとりてかゝるへし

この後に、「師翁蔵古写本如此有奥書」という注記が付されている。『山家集』の原形が、現存諸本の約二倍の規模を有するものであったことを知ることができる。

さて、本書の歌数と版本のそれとを比較してみると、版本にあって本書に欠く歌は三八七首である。又、版本に欠く陽明本独自歌六首のうち、213の次(209)、901の次(887)、1528の次(1511)の各歌、計三首を有する。

本書初見歌は六六首である。241(236)、563(551)、1040(1024)の各歌については、諸家により、本書初見歌として扱われている。ま

さに初見歌として見なければならないほど詞句に大きな異同があるが、版本の歌に重ねて校異がなされている以上、詞句に異同多き歌として扱うべきものと考え、別歌としては計算しなかった。参考までにそれらの歌を掲出する。（本文は版本、傍記したのは松屋本である。）

241 みまくさに原の小薄（はらのゝすすきかりをきて）しかふとて
　　ふしとあせぬとしかおもふらん（236）
　　（しかのふしとをみをきつるかな）
563 さゆれとも心やすくそ聞あかす
　　夜をさむみ声こそしけく聞ゆなれ
　　河せの千鳥友くしてけり（551）
1040 いそのかみふるきすみかへ分いれは
　　あれたる宿をとひにきて
　　庭のあさちに露そこほるゝ（1024）
　　たもとに雨そさらにふりぬる

重出歌は一首、421(414)が1108(1092)の次に重出する旨、眉上に書入れがある。

以上によって、歌数は版本より三八七首少なく、七十首多い一二五二首である。

ただ、延宝三年奥書本にすでにかなりの脱落があることは、次のような例によっても推測できる。

501(491)は、「長楽寺にて夜紅葉を」の詞書のみあって、501(491)歌～508(497)詞書までを欠き、すぐ508(497)歌に続いてしまっている。そして、501(491)詞書の後に「此哥ヨリ左八行ノ水上葉落ト云題マテ无クテ立田姫ノ哥ヲ直ニコヽニ書タリ是ハ窓テ落文ナラン」と注記している。

又、750(735)為業の返歌は、「返し」の語が脱落し、ともに西行の歌になってしまっている。

1108(1092)の次には、上述した421(414)の重出のことを記した後、「其次に此巻三十六左のかへり行人の心を思ふにも云々といふ歌より末を書つゝけたりされと其歌の詞書はなし」との書入れがある。そして1109(1093)～1113(1096の次)歌を欠き、1114(1097)詞書に「此こと書は无」と注記し、さらに眉上に、「此二丁前へ書つけてありて／肩に　此間哥落たる歟」と記している。「此間哥落たる歟」は原写本にあったものであろう。

さらに、同系の次述する天理図書館蔵丙本と比較してみると、巻末百首歌のうち1480(1462)、1538(1521)、1539(1522)、1543(1526)、1558(1541)の五首を本書は欠いている。天丙本には存するのであり、又、百首という定数歌なのであるから、祖本には当然あった筈である。

又、本文に書入れをしながら、896(881)詞書、940(926)詞書、1080(1064)歌、1099(1083)歌、1176(1159)詞書などには、延宝三年奥書本所載歌であることを示す○印を書落しており、転写の際の誤脱もある程度考えられよう。

いずれにしても、いわゆる松屋本の祖本は、延宝三年奥書本よりかなり歌数の多いものであったと思われるのである。

さて、次に歌の排列に関し、陽明本と比較してみると、陽明本の排列に一致するのは、㈠36(33)・35(34)、㈡57(53)・56(54)、㈢564(550)・563(551)、㈣1147(1130)・1150(1131)・1149(1132)・1148(1133)、㈤1332(1313)・1331(1314)、㈥1387(1368)・1386(1369)の各箇所であり、版本の

それに一致するのは、㈠458(452)・459(451)、㈡708(694)・709(693)の二箇所である。他の箇所については、内に含まれる歌一首乃至数首を欠いていて、どちらの排列によるとも決めることができない。が、排列に関しては全体的にみて、版本よりは陽明本に近いものであるといってよいであろう。

さらに、陽明本に欠く版本独自歌二十三首を一首も含まないこと、内題が「山家集」であること、版本では63(60)の前にある詞書「花のうたあまたよみけるに」が、本書では陽明本と同様65(62)の前に位置していること、版本には欠いている817(802)左注が存すること、943(929)作者名の下に「長門入道」の注記がみられないこと、などの幾つかの徴証は、本書が全体として陽明本に近い形態を有するものであることを証するであろう。

他に本書独自の排列を示すものには、㈠121(119)→88(85)の次、㈡127(125)・126(124)、㈢184(181)→200(196)の次、㈣328(322)・327(321)、㈤890(875)・889(874)・891(876)、㈥1358(1340)→1366(1348)の次、の各歌がある。

次に本文をみると、陽明本系とも版本系ともいちがいに総括しえぬ独自の本文を有している。いま、試みに陽明本と版本とで本文を異にする箇所について、本書がそのいずれに一致するかを調べてみると、版本に一致するものが、三百十カ所余り、陽明本に一致するものが三百カ所余り、そのいずれとも異るものが八十カ所余りである。この数字は両本に大量に存する、誤写・誤刻の類を含んでのものであるが、大方の傾向は示していると思われる。すなわち、本文に関しては、陽明本と版本のいずれでもない、いわば中間的傾向を示しているのである。

本書も時に、明らかに誤りと思われる方の本文に一致することもあるが、多くの場合、正しいと思われる方の本文に一致していることは注意すべきであろう。しかも当該歌が、『山家心中集』、『西行上人集』などにも入集している場合、それらの歌集の本文と一致する場合がしばしばみられる。

	本書	陽明本	版本	備考
43(40)	詞書	いせのにもり山	いせのにしふく山	
96(93)	初句	老つとに	老つとに	山家心中集、西行上人集、本書に同じ
98(95)	第五句	我はおしまん	我はおしまん	
212(207)	第四句	むなてにすくる	むなてにすつる	
247(242)	初句	露のほる	露のほる	山家心中集、西行上人集、本書に同じ
300(295)	第五句	秋蟬のこゑ	秋の蟬かな	
442(435)	第四句	鹿あはれなる	鹿のねたえぬ	山家心中集、西行上人集、本書に同じ

603(588)第四句	やみにかこへる	やみとかいへる	やみとかこへる	山家心中集は本書に同じ、西行上人集は陽明本に同じ
749(734)第五句	かたみなるらめ	かたみなりけれ	かたみなるらめ	
893(878)第二句	つらなる袖に	つらなるそてに	つらなる軒に	西行上人集「僧綱」
933(919)詞　書	……そうかう	……僧都	……僧綱	
1006(991)第五句	うくひすのこゑ	うくひすのこゑ	たにの鶯	
1258(1240)第五句	色はみえける	色もみへける	色はみえける	山家心中集、西行上人集、本書に同じ
1385(1367)第五句	玉とまらまし	玉とちらまし	玉とまらまし	山家心中集、西行上人集、本書に同じ

（注・『山家心中集』は、宮本家本、『西行上人集』は藤岡本に拠った。）

一方、本書には独自異文が多いことも従来指摘されているとおりである。

933(919)詞書「阿闍梨兼賢……」は、版本系「兼堅」、陽明本系「源賢」とあるが、源賢は寛仁四年入滅（彰考館蔵二冊本僧綱補任）であり、僧綱補任抄出（群書類従巻五四）長寛二年の条には兼賢の名がみえ、『山家心中集』にも同様にあるから、本書の如くあるのが正しいのであろう。かかる有益な本文もあれば、殆んど意味をなさないまでの粗悪な本文も多量に存する。

しかしながら、本書は伊藤嘉夫氏が指摘されている如く（「古鈔本山家集残闕本について」前掲）、「俊成」の名が「あきひろ」となっていること、他の諸本「恋百十首」となっているものが本書では「恋百」とあること、1387(1368)歌の次に諸本「又ある本に」とある注記が、本書には記されていないこと、など注目すべき本文を有しており、本書が『山家集』の原型を探るうえで、最も注意すべきものの一つであることは、疑いない。

なお、本書は「上本」「上末」「下本」「下末」の四冊に分冊されている。「上」が四季及び恋、「下」が雑歌である点、版本と同様であるが、それぞれの「本」「末」は、秋歌と雑歌の途中で分冊されており、その分冊が如何なる理由によってなされたか未詳である。恐らく分量的に、ほぼ等量になるようになされたものではなかろうか。

天理図書館蔵竹柏園旧蔵〔江戸初期〕写　残闕本　一冊

〔函架番号　九一一・二三・イ六五（A八七九）〕

縹色無地表紙。二十五・六×一八・一糎。字面高さ約二十一・五糎。毎半葉十行。墨付五十二丁。外題・内題ともになし。奥書、平井氏蔵版本書入れ本にほぼ同じ。

本書は、平井氏蔵本に先立って発見紹介された、松屋本系統

に属する一本である。但し、現存するのは、平井氏蔵本「下末」にほぼ相当する残闕一冊のみである。

本書は、1102(1086)詞書途中以下を収める。高城氏の指摘される如く（「松屋本『山家集』について」、前掲）、「下末」の初一丁分を欠いたのであろう。平井氏蔵本と比較した場合、同本に欠いていた1480(1462)、1538(1521)、1539(1522)、1543(1526)、1558(1541)の各歌を有する。他はすべて一致する。従って、本書の歌数は三四六首である。

歌の排列についても、おおむね平井氏蔵本に一致する。ただ一カ所、平井氏蔵本に特徴的であった1358(1340)が1366(1348)の次に位置していた点は、平井氏蔵本と異なり、版本どおり（陽明本も同じ）の歌順である。

本文も小異はあるが、おおむね平井氏蔵本に近似する。

奥書も、平井氏蔵本「本書云」が本書で「本書本云」となっている以外は、平井氏蔵本と同一内容である。

結び

『山家集』は西行歌集の中で、最大の歌数を有するものであるが、現存伝本のいずれもが近世以後の書写・刊行にかかるものであり、本文にも大きな混乱が生じている。そして、それらの諸本の中で、近年は陽明文庫本が最善本として諸テキストの底本に用いられ、版本は殆んど顧みられない状況にあったといっても過言ではあるまい。

しかるに、版本系本文も又、西行と同時代の書写と見做される『山家心中集』宮本家本本文に一致するものが多く、陽明本に比して、必ずしも粗悪な本文ということはできないであろうことは上述したとおりである。

事実、陽明本の伝流過程に於ては、絶えず版本系本文との間に交流が行われたのである。第一類本Cの島原公民館松平文庫蔵本、京都大学国文学研究室蔵本、第二類本Cの日本女子大学国文学研究室蔵本以下の数本、又第三類本として分類した、細川幽斎によって書写校合のなされた系統の伝本には、かかる傾向が顕著にみられたのであった。なかでも第二類本Cの筑波大学蔵本は、本文の一部を相当箇所削り取って、版本の本文によって改訂を施しているし、第四類本として分類した多和文庫本は、両者の本文をほぼ等分に有するかの如き観を呈するものであった。陽明本系本文の誤りを、版本の本文によって正そうとする試みが、常に行なわれたのである。

陽明文庫本は、同系類諸本の中でも、最も源流に近い位置に立つものであることは、従来より指摘されているとおりである。が、惜しむらくは誤写がきわめて多量に存する。誤写が少ないという点では、むしろ陽明本と本文を共有する学習院大学蔵本の方が、陽明本に優る善本であると認めてよいのではなかろうか。

陽明本に誤写が多く存した如く、版本にも又誤りが多い。これが従来、版本が重んじられなかった最大の理由である。しかるに、版本系諸本の中では、三手文庫本が比較的誤り少なく、版本を遡り得る本文を有しているものと思われる。そのような

意味では、三手文庫本が、版本系諸本の中では、最も注意すべき一本であろう。

さらに、陽明文庫本に近い形態を有しながら、本文に関しては、両系類のほゞ中間的な性格を有し、『山家集』の原型を探る手がかりとなる有力な一系類に松屋本があった。そして版本系の三手文庫蔵本、殊にその下巻には、しばしば松屋本の本文に一致する例を見出すのである。

ともあれ、陽明文庫本のみが重んじられ、版本がほとんど注意されない現状は、再検討される必要があるであろう。版本も又、西行と同時代まで遡り得る本文を有するものとして、注意する必要があると考えるのである。

（昭和五十六年七月稿）

〔補遺〕

印刷所入稿後、次の一本を閲覧することができた。

高知県立図書館蔵〔江戸後期〕写　二冊

縹色無地万字つなぎ空押表紙、二十五・七×一八・二糎。字面高さ約二十・五糎。毎半葉十一行。墨付上冊五十一丁、下冊七十三丁。表紙左肩に打曇文様白紙短冊を添付、「六家集　山家和歌集／西行上人　上」と墨書。内題「山家和歌集上（下）」。印記「山内文庫」。858(843)歌及び859(844)詞書を欠き、歌数一五六八首。排列は版本に同じ。版本による写本。

付表凡例

一、付表一・二・三は、掲出諸本の異同を略表記したものである。

一、諸本の異同は、版本を基本とした。従って、掲出した番号は、私に付した版本の通し番号であり、（　）内に陽明文庫本（私家集大成本）の番号を付して対照した。

一、一覧に供する為に、諸本並びにその異同については、次の略記号をもってこれに代えた。

㈠諸本略記号→本文三七四～三七五ページ参照。

㈡異同略記号

○版本非収録歌、×版本収録歌にして当該本非収録歌、〔×〕後補せる版本収録歌、（上記補入歌中、「付紙」等の注記のあるものに限り、〔×付〕を用いた。）、●その他の書入れ歌、又、上記略記号以外に注記する必要の生じたものについては、※を付し、備考欄に記した。

次に、排列に関して、版本と異なる排列がみられる場合には、その排列を上欄に掲出した。そして、上掲した排列と同一の場合は、「同」と記した。

一、東北大学附属図書館蔵甲本上巻については、排列の異同が著しいため、別表を設けた。

付表一　版本系諸本異同一覧

版本番号（陽明本番号）	長国志	甲乙丙丁志志志志	都書	甲静	神米	穂	甲乙穂	大	甲乙東東	三	備考
一二（一〇）											
一三（一一）											
二五（二三）											
二八（二六）											
四八（四五）											
五七（五三）・五六（五四）											
八三（八〇）↓九〇（八七）の次											
九二（八九）～一〇〇（九七）											
一一三の次（一一一）											
一二七（一二五）↓一三三（一三一）の次											
一三〇（一二八）↓一三二（一三〇）の次											
一三七（一三五）											
一五六（一五四）											
一六二（一六〇）											
一七五（一七三）											
一九六（一二九の次）～二〇〇（一九六）											
二二〇（二一五の次）↓二二六（二二一）の次											
二三二（二二七）↓二三四（二二九）の次											
二六九（二六四）											

版本番号（陽明本番号）	長国志	甲乙丙丁志	甲都書	静神	米穂	甲乙穂	大東	甲乙東	三	備考
二七一（二六六）										
二七三（二六八）										
三五七（三五一）↓三六一（三五五）の次										
三六五（三五九）										
三八〇（三七四）・三七九（三七三）										
三八〇（三七四）〜四〇三（三九七）										
三九五（三八九）										
三九八（三九二）										
四〇三（三九七）										
四三〇（四二三）										
四四一（四三四）										
四七〇（四六一）の次										
四七三（四六四）										
四八二（四七三）										
四九一（四八一の次）										
四九八（四八八）										
五〇五（四九四）										
五〇六（四九五）										
五一一（五〇〇）										
五一三（五〇二）										
五五三（五四〇）↓五五五（五四二）の次										

版本番号（陽明本番号）	長国	甲	乙	丙	丁	都	書	甲	静	神	米	穂	穂	大	東	東	三	備考
五六八（五五五）																		
五七三（五六〇）・五七二（五五九）																		
五八八（五七五）																		
五八九（五七五の次）																		
六一四（五九九）																		
六二六（六一一）の次																		
七〇七（六九二）→七一一（六九六）の次																		
七〇七（六九二）の次																		
七〇九（六九三）→七二六（七一一）の次																		
七二四（七〇九）																		
七三七（七二二）～七四二（七二七）																		
七七七（七六二）																		
八四五（八三〇）																		
九〇一の次（八八七）																		
九六七（九五三）→九七一（九五七）の次																		
九八九（九七四の次）→九九三（九七八）の次																		
一〇〇九（九九三）→一〇一九（一〇〇四）の次																		
一〇一一（九九六）・一〇一〇（九九五）																		
一〇六四（一〇四八）																		
一〇七八（一〇六二）																		
一一二五（一一〇八）																		

版本番号（陽明本番号）	長国	志甲	志乙	志丙	志丁	都	書甲	静	神	米	穂甲	穂乙	大	東甲	東乙	三	備考
一一五〇（一一三二）の次		欠 727 (712) ～ 1569 (1552)	欠 727 (712) ～ 1569 (1552)			※●											（都）一一四七（一一三三）書入れ（重出）
一一五七の次（一一四一）						※●											（都）陽明本独自歌「なかれいつるなみたにけふは…」を書入れ
一一九四（一一七七）→一一九七（一一八〇）の次										同							
一一九四（一一七七）→一一九九（一一八二）の次									同								
一二〇一（一一八四）							※×										（書甲）一二〇一歌より一二〇二（一一八五）詞書まで欠く
一二〇二（一一八五）															×		
一二八九（一二七一）→一二九二（一二七四）の次									同								
一三一〇（一二九二）→一三〇七（一二八九）の次															同		
一三七九（一三六一）															×		
一三八〇（一三六二）・一三七九（一三六一）	同																
一三八七（一三六八）・一三八六（一三六九）																同	
一四五八（一四四〇）	〔×〕																
一四八九（一四七一）・一四八八（一四七〇）														同			
一四九三（一四七五）→一五〇〇（一四八二）の次				同													
一五〇〇（一四八二）・一四九九（一四八一）									同								
一五一〇（一四九二）														×			
一五二八の次（一五一一）						※●											（都）陽明本独自歌「ふかき山は苔むすいはを…」を書入れ
一五五五（一五三八）											※×						（穂甲）一首分空白
一五六六（一五四九）～一五六七（一五五〇）											※×						（穂甲）二首分空白

付表二　陽明本系諸本異同一覧

版本番号（陽明本番号）	第一類本					第二類本								第三類本				第四類本	備考
	陽	学	乙	松	研	甲	乙	洋	日	甲	甲	京	筑	乙	神	丙	乙		
五（四の次）	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×				
一一（九の次）	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×				
三六（三三）・三五（三四）	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同				
三七（三四の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕	×		×	×	×	〔×〕	〔×〕	〔×〕				
五七（五三）・五六（五四）	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同				
七七（七五）													〔×〕		×				
七七（七五）・七六（七四）												同					同		
七八（七六）→八四（八一）の次																			
七九（七〇）									※〔×〕										補入位置は、（日）七二（六九）の次、（京）七八（七五）の次
七九（七〇）→七二（六九）の次	同	同	同	同	同	同	同	同		×	×	×	※〔×〕	同	同	同	同	同	
一一三の次（一一一）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
一一七（一一五）→一二三（一二一）の次													同						
一七〇（一六八）						×	〔×〕	×		×	×	×	〔×〕		〔×〕				
一七五（一七三）																			
一七七（一七五）の次														※●	※●				
一七九（一七六の次）						×	×	×		×	×	×	〔×〕	〔×〕付	〔×〕付				歌を書入れ（神宮）一七九（一七六の次は本行）（天乙）（神宮）
一九六（一九二の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕	×		×	×	×	〔×〕	〔×〕付	〔×〕付				
二〇七（二〇二）・二〇八（二〇三）・二〇六（二〇四）	同	同	同	同	同	×	×	×		×	×	×	〔×〕	※〔×〕	※〔×〕				二〇八歌及び二〇六詞書を欠き補入（天乙）（神宮）
二〇八（二〇三）	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	※〔×〕	※〔×〕	同	同	同	

版本番号（陽明本番号）	第一類本					第二類本									第三類本				第四類本	備考
	陽	学	乙書	松	京研	甲	関乙	関洋	東	日	市	天甲	茶甲	京	筑	天乙	神宮	書丙	茶乙	多	
二一一（二〇六の次）	×	×	×	×	×																
二一三の次（二〇九）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
二二〇（二一一五の次）・二一九（二一一五）										同											
二二〇（二一一五の次）	×	×	×	×	×	×	※〔×〕				×				〔×〕付	〔×〕付					（関乙）書入れ位置は二一八（二一四）の次
二二三（二一一八）・二二二（二一一七）															同	同					
二二九（二一二四）																			×		
二八六（二八一）の次																					
三一七（三一一の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕				※●					※〔×〕					（市）二八九（二八四）歌重出
三二八（三二二）						×	〔×〕									×					（天乙）書入れ位置は三一九（三一三）の次
三二九（三二三）						×	×														
三三〇（三二四）～三三八（三三二）						×	×														
三三九（三三三）						×	×														
三四〇（三三四）						×	×														
三四一（三三五）						×	×										×				
三四二（三三六）～三四三（三三七）						×	×										×				
四一〇（四〇四）・四〇九（四〇三）						×	〔×〕														第二類本の多くが三二八（三二二）～三四三（三三七）を欠く
四一三（四〇七）の次						●															
四二〇（四一三の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕									〔×〕付	〔×〕付				
四三八（四三一）																			×		
四五九（四五一）・四五八（四五二）	同	同		同	→																（関甲）四一〇（四〇四）～四一三（四〇七）歌重出（本行）

欠 204 (200) ～ 591 (577)

欠 321 (315) ～ 352 (346) 補写

版本番号（陽明本番号）	第一類本					第二類本										第三類本				第四類本	備考
	陽学	乙書	松	京	研	甲	乙	洋	関	関	東	日	市	天	茶	京	筑	乙	宮	神	書	丙	乙	茶	多		
四六〇（四五三）・四五九（四五一）・四五八（四五一）																											
四六二（四五四の次）	×	×	×	×		同	同									同	同	〔×〕付	〔×〕付	同	同	同	同				
四六六（四五八）・四六五（四五七）	×	×	×	×																							
四六七（四五八の次）	×	×	×	×																							
四八五（四七六）	×	×	×	×																							
四九一（四八一の次）	×	×	×	×																							
四九八（四八八）																											
五〇二（四九一の次）	×	×	×	×																							
五〇七（四九六）・五〇六（四九五）	×	×	×	×																							
五三七（五二五の次）																											
五四一（五二八の次）	×	×	×	×																							
五六四（五五〇）・五六三（五五一）	同	同	同	同		同	同									同	同	〔×〕付	〔×〕付	同	同	同	同		同		
五六三（五五一）→五六六（五五三）の次																											
五七八（五六五）→五七五（五六二）の次																											
五八九（五七五の次）	×	×	×	×																							
五九六（五八一の次）	×	×	×	×																							
六〇九（五九四）〜六一九（六〇四）																											
六五四（六四〇）																											
六八六（六一二）→六二六（六一一）の次	同	同	同	同		同	同									同	同	〔×〕付	〔×〕付	同	同	同	同		同		
六八六（六一二）																								×			

欠 443 (436) ～ 591 (577)

※●　※●　※●　※●　※●　※●　※●　※●

（関乙）（日）（筑）（天乙）（多）
六八六（六一二）を番入れ
（重出）、（日）（多）は本行

（版本）重出歌、六二〇
（六〇五）に同じ

版本番号（陽明本番号）	第一類本					第二類本								第三類本				第四類本	備考
	陽	学	乙書	松	京研	関甲	関乙	東洋	日	市	天甲	茶甲	京	筑	天乙	神宮	書丙	茶乙	多	
七〇九（六九三）・七〇八（六九四）	同	同													同	同	同			
七〇九（六九三）・七〇八（六九四）																		×		
七三三（七〇七）・七二二（七〇八）	同	同	門	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同			
七六四（七四九）									×	×	×	×	×	×						
七七四（七五九）																				
七九〇の次（七七六）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
八〇五（七九〇の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕	×	×	×	×	×	×	〔×〕	〔×〕付	〔×〕付				
八一八（八〇三）の次																	※●			（茶乙）八一八（八〇三）重出
八二二（八〇七）～八三〇（八一五）						×	〔×〕	×						〔×〕						
八九七（八八二）																				
九〇〇（八八三）→八九七（八八二）の次	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	
九〇一の次（八八七）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
九六〇（九四五）・九五九（九四六）	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	
九七八（九六四）→一〇五七（一〇四一）の次						※同	※同													
九八九（九七四の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕	×		×	×	×	×	〔×〕	〔×〕付	〔×〕付				
九九〇（九七五）																				
一〇〇三（九八八）																				
一〇〇七（九九四）→一〇〇九（九九三）の次	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	
一〇一三（一〇〇七の次）	×	×	×	×	×	×	〔×〕	×	×	×	×	×	×	〔×〕	〔×〕付	〔×〕付		×		
一〇四五（一〇二九）																		×		

版本番号（陽明本番号）	第一類本 陽学	乙研	松京	第二類本 甲関	乙関	洋東	日市	甲天	甲茶	京筑	第三類本 乙天	宮神	丙書	乙茶	第四類本 多	備考
一〇四六（一〇三〇）→一〇四九（一〇三三）の次																
一〇八〇（一〇六四）・一〇七九（一〇六三）																
一〇九一（一〇七五）の次																
一〇九四（一〇七六）→一〇九一（一〇七五）の次	同	同	※●	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	（松）一〇九四（一〇七六）を書入れ
一一一三（一〇九六の次）	×	×		×	×	×		×	×	×	※〔×〕	×	※〔×〕			
一一一三（一〇九六の次）→一一一五（一〇九八）の次										※				同		（筑）一一一二（一〇九六）詞書欠き補写（天乙）巻末に書入れ（書丙）貼紙して書入れ
一一四七（一一三三）→一一五〇（一一三三）の次	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
一一五七の次（一一四一）	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
一一六八（一一五一の次）	×	×		×	〔×〕	×		×	×	※	※〔×〕	×	※〔×〕			（筑）一一一六七（一一一五一）より一一七五（一一一五八）作者まで欠き補写（天乙）巻末に書入れ
一一八三（一一一六六）																
一一一三（一一一九六）																
一一一三（一一一九六）→一一二一九（一一一〇二）の次																
一一二一（一一二〇四）→一一二二三（一一二〇六）の次																
一一二三五（一一二一七の次）	×	×		×	×	×		×	×	×	〔×〕	×	※〔×〕			（天乙）巻末に書入れ（書丙）貼紙して書入れ
一一二七三（一一二五五）→一一二七五（一一二五七）の次																
一一二九七（一一二七九）→一一三〇〇（一一二八一）の次																
一一三〇三（一一二八五）・一一三〇一（一一二八四）																
一一三一四（一一二九六）→一一二九九（一一二八一）の次																
一一三一四（一一二九六）・一一三一三（一一二九五）																
一一三三一（一一三一三）・一一三三一（一一三一四）	同	同														

版本番号（陽明本番号）	第一類本					第二類本									第三類本				第四類本	備考
	陽	学	書乙	松	京研	関甲	関乙	東洋	日	市	天甲	茶甲	京	筑	天乙	神宮	書丙	茶乙	多	
一三四七（一三三九）・一三四六（一三三八）	同	欠 1058 (1042) 以下																同		
一三五〇（一三三三）・一三四九（一三三一）																			同	
一三五七（一三三九）→一三六三（一三四五）の次	同		同	同	同				同											
一三六三（一三四五）の次							※●													（関乙）一三五七（一三三九）を書入れ
一三八七（一三六八）・一三八六（一三六九）	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
一三八六（一三六九）の次																			※●	（多）一三八七（一三六八）重出
一四一六（一三九八）・一四一五（一三九七）						同														
一四九八（一四八〇）→一五〇〇（一四八二）の次													同							
一五〇五（一四八七）						×	×	×	×	×	×	×	×	×						
一五二八の次（一五一一）	○		○	※○	※○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	（松）（京研）一五二九（一五一二）の次にあり
一五四九（一五三二）																	〔×〕			
一五五七（一五四〇）											※	※	※							（天甲）（茶甲）（京）上二句のみ
一五五八（一五四一）→一五六三（一五四六）の次																		同		

付表三　松屋本系諸本異同一覧

一、平井卓郎氏蔵版本書入れ本

A、版本にあって本書に欠く歌

1(1)、2(2)、5(4の次)、11(9の次)、18(16)、37(34の次)、39(36)、40(37)、52(49)、53(50)、60(57) 64(61)、
73(71)~87(84)、108(105)、112(109)、128(126)~138(136)、156(154)、161(159)、172(170)、175(173)、178(176)、179(176の次)、182(179)、
183(180)、188(185)、190(187)~196(192の次)、205(201)、206(204)、207(202)、208(203)、211(206の次)、213(208)、214(210)、217(213)、219

(215)～234(229)、243(238)、248(243)、254(249)、264(259)、271(266)～273(268)、278(273)、281(276)、284(279)～286(281)、291(286)、313(308)、317(311の次)、322(316)、323(317)、329(323)、331(325)、332(326)、335(329)、338(332)、341(335)、342(336)、347(341)、348(342)、365(359)、366(360)、386(380)～388(382)、390(384)、392(386)、395(389)～398(392)、401(395)、402(396)、408(402)、410(404)、412(406)、414(408)～416(410)、419(413)、420(413の次)、424(417)、425(418)、429(422)、433(426)、435(428)、441(434)、444(437)、449(442)、454(447)、455(448)、461(454)～468(459)、473(464)、483(474)、486(477)、491(481の次)、493(483)、496(486)、500(490)、501(491)～507(496)、518(507)、519(508)、537(525の次)、541(528の次)、544(531)、586(573)、588(575)、589(575の次)、590(576)、596(581の次)、598(583)、600(585)、602(587)、606(591)、607(592)、617(602)、619(604)、620(605)、626(611)、630(616)、635(621)、648(634)、669(655)、671(657)、675(661)、677(663)～680(666)、686(612)、688(673)、689(674)、691(676)、696(681)、718(703)、721(706)、723(707)、732(717)、734(719)、744(729)、775(760)、777(762)、779(764)、781(766)～783(768)、790(775)、805(790の次)、806(791)、840(825)、841(826)、867(852)、877(862)、878(864)、892(877)、895(881)、900(883)、922(908)～926(912)、930(916)、936(922)～942(928)、960(945)、987(973)、989(974の次)、1007(994)、1010(995)、1023(1007の次)、1059(1043)、1061(1045)、1062(1046)、1064(1048)、1066(1050)、1067(1051)、1070(1054)～1072(1056)、1073(1057)、1074(1058)、1081(1065)～1083(1067)、1087(1071)、1088(1072)、1090(1074)、1091(1075)、1094(1076)、1100(1084)、1101(1085)、1107(1091)、1109(1093)～1112(1096)、1113(1096の次)、1118(1101)、1119(1102)、1121(1104)～1136(1119)、1138(1121)、1155(1138)～1157(1140)、1166(1150)、1168(1151の次)、1187(1170)、1191(1174)、1201(1184)～1204(1187)、1235(1217の次)、1236(1218)、1237(1219)、1239(1221)、1244(1226)、1249(1231)～1255(1237)、1261(1243)、1263(1245)、1267(1249)、1268(1250)、1271(1253)、1278(1260)、1282(1264)、1289(1271)、1291(1273)、1310(1292)、1327(1309)、1352(1334)、1357(1339)、1367(1349)、1403(1385)、1408(1390)～1470(1452)、1480(1462)、1538(1521)、1539(1522)、1543(1526)、1558(1541)

(以上三八七首)

B、版本にない、本書所収歌

6(5)の次〔五首〕、20(18)の次、31(29)の次、55(52)の次、160(158)の次〔十首〕、204(200)の次〔五首〕、※212(207)の次、330(324)の次〔三首〕、341(335)の次〔五首〕、383(377)の次、475(466)の次、511(500)の次、555(542)の次、556(543)の次、629(615)の次〔九首〕、741(726)の次〔五首〕、783(768)の次〔三首〕、890(875)の次〔十首〕、※901(886)の次、1020(1005)の次、1260(1242)の次、1288(1270)

の次、※1528(1510)の次　（以上六九首）

（※印を付した三首は、陽明本系諸本にもみられる。従って松屋本系の独自歌は六六首。）

又、1108(1092)歌の次に421(414)歌が重出する旨の書入れがある。

C、版本と排列の異なるもの

※㈠36(33)・35(34)、※㈡57(53)・56(54)、㈢121(119)→88(85)の次、㈣127(125)・126(124)　㈤184(181)→200(196)の次、㈥328(322)・327(321)、※㈦564(550)・563(551)、㈧891(876)・889(874)・890(875)、※㈨1148(1130)・1149(1131)・1150(1132)・1147(1133)、※㈩1332(1313)・1331(1314)、㈠1358(1340)→1366(1348)の次、※㈡1387(1368)・1386(1369)　（※印を付した排列は、陽明本系諸本にもみられる。）

二、天理図書館蔵丙本

A、版本にあって本書に欠く歌

1(1)～1101(1085)、1107(1091)、1109(1093)～1113(1096の次)、1118(1101)、1119(1102)、1121(1104)～1136(1119)、1138(1121)、1155(1138)～1157(1140)、1166(1150)、1168(1151の次)、1187(1170)、1191(1174)、1201(1184)～1204(1187)、1235(1217の次)～1237(1219)、1239(1221)、1244(1226)、1249(1231)～1255(1237)、1261(1243)、1263(1245)、1267(1249)、1268(1250)、1271(1253)、1278(1260)、1282(1264)、1289(1271)、1291(1273)、1310(1292)、1327(1309)、1352(1334)、1357(1339)、1367(1349)、1403(1385)、1408(1390)～1470(1252)

B、版本にない本書所収歌

1260(1242)の次、1288(1270)の次、※1528(1510)の次、また1108(1092)歌の次に421(414)歌が重出する。

（※印を付したものは、陽明本系諸本にもみられる。）

C、版本と排列の異なるもの

㈠1148(1130)・1149(1131)・1150(1132)・1147(1133)、㈡1332(1313)・1331(1314)、㈢1387(1368)・1386(1369)

（以上はすべて陽明本系諸本にもみられる。）

東北大学附属図書館蔵甲本、上巻排列異同一覧

9(8)、1(1)〜6(5)、8(7)、11(9の次)、16(14)〜18(16)、7(6)、10(9)、1075(1059)、14(12)、15(13)、26(24)、29(27)〜32(30)、27(25)、19(17)、21(19)、23(21)、20(18)、22(20)、24(22)、37(34の次)、41(38)〜45(42)、38(35)〜40(37)、46(43)、47(44)、56(54)、58(55)、57(53)、55(52)、163(161)、54(51)、48(45)、63(60)〜95(92)、97(94)〜107(104)、145(143)〜150(148)、152(150)、151(149)、153(151)〜155(153)、157(155)〜159(157)、1086(1070)、61(58)、62(59)、59(56)、60(57)、96(93)、109(106)〜137(135)、139(137)、140(138)、138(136)、142(140)、143(141)、108(105)、141(139)、144(142)、160(158)、51(48)、49(46)、50(47)、33(31)〜36(33)、52(49)、53(50)、169(167)、170(168)、161(159)、162(160)、164(162)〜168(166)、172(170)、171(169)、173(171)〜175(173)、180(177)、181(178)、178(176)、179(176の次)、185(182)〜188(185)、191(188)〜200(196)、『拾玉集』巻三より「ほのかなる」、「友もなし」、「ときしもあれ」、「きく人の」、「過きぬる」、183(180)、189(186)、190(187)、201(197)、182(179)、184(181)、202(198)〜204(200)、206(204)、209(205)〜211(206の次)、207(202)、208(203)、212(207)〜234(229)、237(232)、244(239)、241(236)、242(237)、239(234)、240(235)、253(248)、250(245)、251(246)、247(242)、252(247)、254(249)、243(238)、235(230)、248(243)、249(244)、236(231)、255(250)〜258(253)、176(174)、177(175)、205(201)、238(233)、245(240)、246(241)、259(254)、260(255)、262(257)〜268(263)、270(265)、299(294)、473(464)、474(465)、278(273)、283(278)、284(279)、396(390)、397(391)、272(267)、395(389)、394(388)、274(269)、480(471)、290(285)〜293(288)、393(387)、275(270)〜277(272)、281(276)、282(277)、285(280)〜289(284)、279(274)、391(385)、392(386)、280(275)、427(420)、426(419)、428(421)〜431(424)、436(429)〜440(433)、442(435)、443(436)、448(441)、444(437)、445(438)、403(397)、446(439)、447(440)、452(445)〜456(449)、458(452)〜467(458の次)、457(450)、451(444)、472(463)、399(393)、400(394)、468(459)、471(462)、470(461)、469(460)、401(395)、484(475)、485(476)、311(306)〜323(317)、343(337)〜371(365)、373(367)、372(366)、374(368)〜384(378)、261(256)、335(329)〜342(336)、385(379)〜387(381)、389(383)、324(318)、390(384)、326(320)〜329(323)、388(382)、325(319)、332(326)、414(408)、421(414)、422(415)、402(396)、415(409)、416(410)、330(324)、331(325)、417(411)〜419(413)、423(416)〜425(418)、333(327)、406(400)、420(413の次)、334(328)、407(401)〜413(407)、432(425)、434(427)、435(428)、405(399)、433(426)、449(442)、450(443)、298(293)、479(470)、

476(467)、477(468)、475(466)、478(469)、489(480)、487(478)、488(479)、483(474)、486(477)、404(398)、492(482)、490(481)、494(484)～497(487)、499(489)、500(490)、294(289)～297(292)、300(295)～310(305)、481(472)、504(493)、514(503)、512(501)、509(498)、515(504)、507(496)、510(499)、493(483)、501(491)、502(491の次)、508(497)、525(514)、526(515)、584(571)、567(554)、569(556)、530(519)～533(522)、528(517)、529(518)、561(548)～565(552)、558(545)、557(544)、559(546)、541(528の次)、542(529)、551(538)～556(543)、537(525の次)、539(527)、545(532)、547(534)、540(528)、581(568)、583(570)、538(526)、550(537)、549(536)、548(535)、543(530)、544(531)、546(533)、516(505)～520(509)、534(523)～536(525)、560(547)、527(516)、582(569)、585(572)、587(574)、588(575)、590(576)、591(577)、586(573)、503(492)、521(510)～524(513)、566(553)、570(557)～580(567)、594(580)、592(578)、629(615)、605(590)、606(591)、595(581)～604(589)、608(593)、607(592)、626(611)、593(579)、624(609)、625(610)、627(613)、628(614)、619(604)、622(607)、612(597)～614(599)、610(595)、611(596)、620(605)、621(606)、616(601)、618(603)、615(600)、623(608)、617(602)、609(594)、630(616)～726(611)、1511(1493)～1520(1502)

〈付記〉

貴重な御所蔵本の閲覧を許され、何かと御高配を賜った平井卓郎博士・久曾神昇博士・神作光一博士・市岡勝太郎氏をはじめ、全国の公私にわたる図書機関とその関係者各位に謹んで感謝の意を表する。

また、何かと御教示にあずかり研究上の便宜を賜った斯道文庫に厚く御礼申し上げる。

尚、本稿はトヨタ財団の研究助成を受けて現在斯道文庫に於て進行中の「国書並びに漢籍総目録の編纂」(代表者・阿部隆一博士)の一端として発表するものであることを付記し、関係各位に深謝申し上げる次第である。